今の盆栽とその培養法

小林憲雄著

はしがき

廣い意味で云ふと盆栽の歴史は古いがそれは所謂鉢植物の事で「植物美」の觀賞であつた。それが大自然の「心」を盆上に寫しこれを表現する今日の藝術盆栽即ち「盆栽美」を鑑賞するやうになつたのは最近の事である。

即ち盆栽は日本の創造した國風の新興藝術であると云はれやう。扨この盆栽が藝術品にまで進んで以來も、その傾向は種々に變遷し、否進步してゐる、明治初年の文人盆栽よりの推移から考へて、今後二三十年後の盆栽の社會的に內容的に總てに進展する事は今日より誰にも想像せられやう、かくの如く盆栽は時代と共に刻々變遷する生きた藝術である、此書が「今の盆栽」としたのは此推移する盆栽界の最新の時好に投じてゐる樹種に就て述べてあるからである。

此書には盆栽鑑賞上の總說を省いて各論と培養とを主としたのは從來の盆栽書にこれを主として說いたものが無いに鑑みてである。

尙此書中の培養法は自分が主宰する盆栽誌の創刊以來八年間時々各樹種に付て其經驗者に敎へを乞ひ、又自らも土を盛り水を注いで研究した事項を誌上に掲載して置いたものを基礎としてこれを改訂增補したものである。

著　者

目次

寫眞十六頁

今の盆栽撰集

欅　直幹

蝦夷松双幹

眞柏

公孫樹双幹

蝦夷松寄植　（三十餘本の叢林）

姫柘榴双幹

蝦夷松直幹

小品盆栽

右 楓（高二寸[illegible]分）

左 紅紫檀樹（高 二 寸）

小品盆栽の棚飾 （最高三寸五分・最小は鉢の徑僅に五分）

果實樹の盆栽

「上」梨（高一尺五寸の木に十二果を着く）

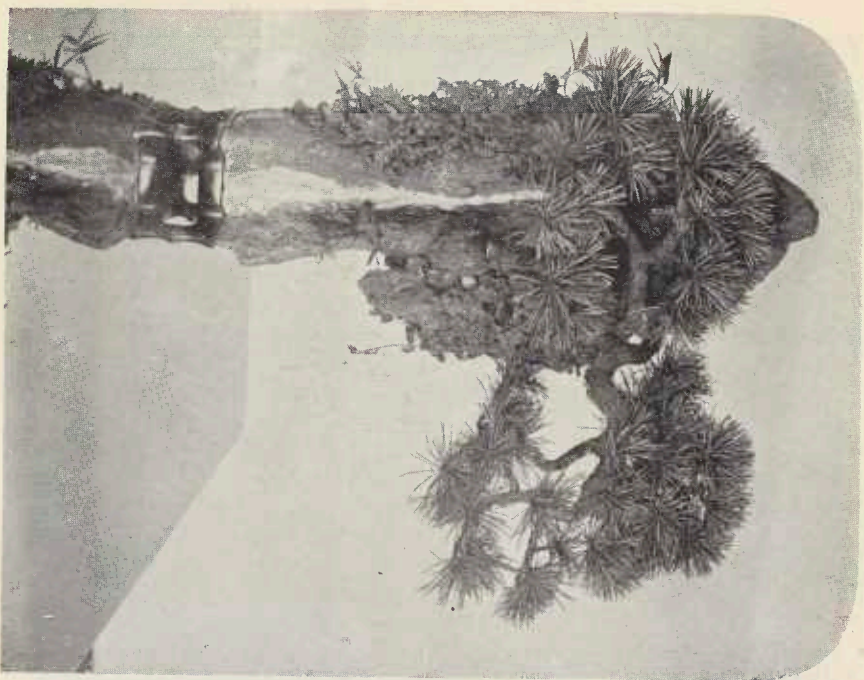
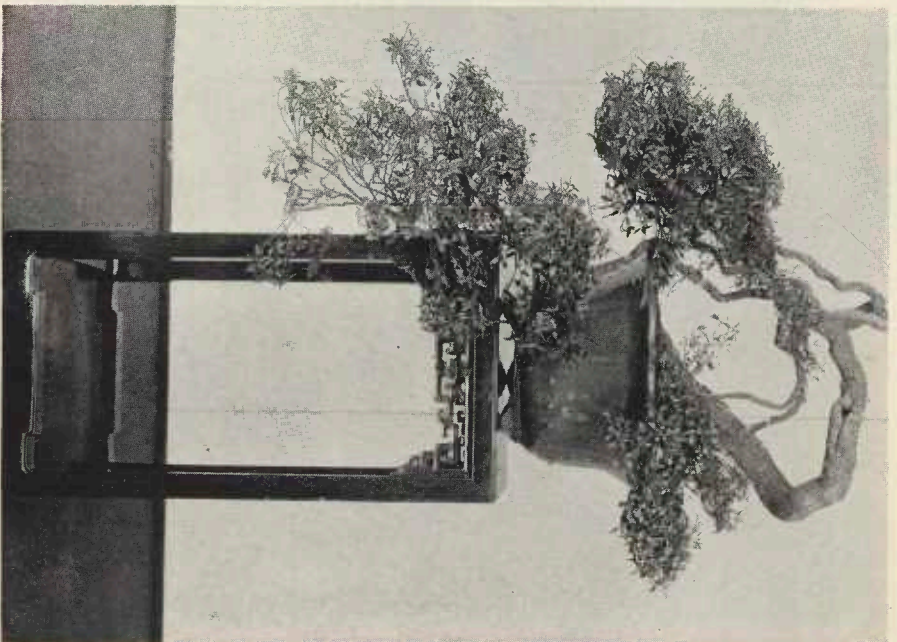
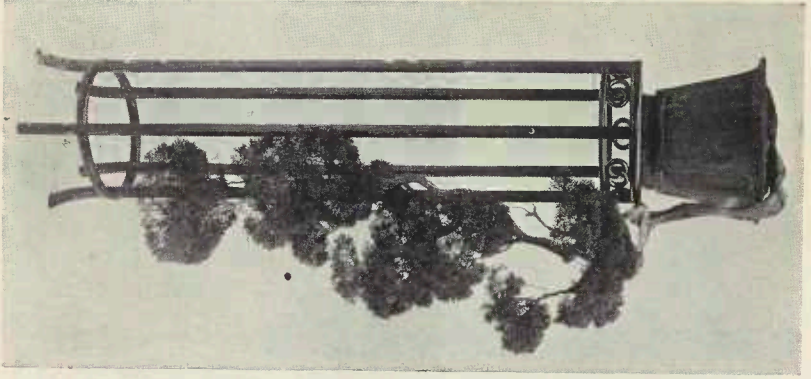
「下」李　累々として美果枝に滿つ

野梅（梅花書屋の寓意陳列）

五葉松石付

縮緬蔓

眞柏の懸崖（垂下五尺）

佛手柑　(果七寸數果あり)

今の盆栽とその培養法

小林憲雄著

樹種に就て

總ての草木の內で盆栽になる木とならぬ木とある。盆栽は大自然の趣を盆上に現すもので、大自然の縮圖「大木の縮圖であるから盆上に縮圖出來る草木で無ければ「盆栽とはなり得ない。

例へば「八ツ手」や「桐」は鉢植として如何に苦心しても盆栽とはなるまい、又美花を開いても「ダリヤ」も「コスモス」も「大菊」も盆栽とはなり得ない「要するに盆栽的素質を具へてゐないのである。

それに引きかへ名も無く花も無い野草でも立派に盆栽としての生命要素を具

へたものがある。

要するに盆樹は大自然の趣を表現し得らるゝ素質あるもので無ければならないと云はれる。

園藝品種よりは原種が盆樹種として歡迎せらるゝ以所は此一理に存する。

盆樹を養作、矯姿するに當つても、其樹の特徴其樹種の持つ情趣を失はせたくない。それを失つたものは、盆樹としての生命精神を拔いてしまつたもので只生きてゐると云ふだけで、造花と同じ鑑賞に墮したものである。

尙又時々耳にする事であるが「盆栽は今は何が流行るか」と云ふ。園藝的變種を騷ぎ珍種を貴とする植物美觀賞から云へば、種樹に流行はあらう、然し大自然美の再現、卽ち第二の自然を以て生命とする盆栽に樹種流行のあらう筈が無い。疇昔迄この傾向のあつたのは過渡期の一現象に過ぎないのであらう。

次に順次記するものは、現在の盆栽種であるが、斯界に知られずまだ用ひられない、盆樹としての良い素質を具へた樹もあらう、又外國樹にても名木を作り得らるゝ樹も數々あるであらう。諸士の研究に俟つ外無い。

松

盆栽の樹種を說くに當つては、先づ松から說くは吾松樹國日本の代表樹として當然であらう。日本人の稜々たる氣骨、所謂男性美は、松樹から影響を受けてゐると云はれやう。幾千年來不易の松の影を眺めて來た吾々の先祖は知らず識らずの間にその偉大なる感化を受けて、吾民族の堅忍不拔百難に屈しない、然も淸節を重んずる氣風はこの常盤の松から養はれたのであらう。老龍鱗の如き幹、靑々四時靑年の如き葉、この雄々しさを觀賞禮讃する吾民族は審美的に歐米人より遙に進步した國民であると云はねばならない。

それ程に松は盆栽としても大物であるだけに、其眞精神を掴む事が難事である。松の鉢植は多い、然し眞の松の風趣を捉へ得た盆栽は少ない。頭梁の材又得難き哉である。

松を詳述するには一卷をなすに足りるのであるが、玆には盆栽として必須なる事項を述べて置く事とする。先づ、松の種類、黑松、赤松、五葉松等を順次に硏究し、松の名を冒す、落葉松、等の如きは別項に詳述する事とする。

黑松（錦松）

黑松は松の雄々しさの代表樹である。細別したる種類から云へば、日本國中にさへ十數の異種を存するが、然し盆栽として、現在最も貴重なるものとして高價を唱へらるゝは錦松であらう。この矢筈形に疊重せる樹皮層を珍とし貴として其優物は好事家に爭奪せられてゐる。

錦松の名は近時の名稱である。大隈侯が熱愛した黑松は、巖石性と云はれてゐた。硬い皮が矢筈形に出るのを錦松と云ふたのは其後の事である、この種類は、瀨戸内海の沿岸及其島嶼からのみ產する黑松中の一變種と云はれやう。多くは淡路島、小豆島、幡馬などから名木を出してゐる。其他にも無いではないが本場は前記の地方であらう。今は全く盆栽としての種木は取り盡くされて、姿の尨大なもののなどの枝を剪り取りこれに根接したり、又は芽接して養つたものが普通の錦松の賣品となつてゐるが、これとても近く其材料が滅亡する事であらう。兎に角他に類の無い奇品であるからこの特異な盆樹は永久に保存し其眞價を全からしめたいものである。

錦松と、普通の黒松との中間性とも云ふものを巖石性と云ふてゐるこれは樹皮が岩石の如くに幹に附着して其如何にも老龍鱗の如き姿は自ら老松の苔蒸し「いはほ」の如き感じがあるので此名を負ふたのであらう、實に老大樹の感じを出すに自然で、如何にも無理の無い處にこの尊さがある産地は錦松と同じである。

朝鮮松も其樹皮は錦性或は巖石性であるが、葉性は所謂間黒(あひぐろ)と云ふ黒松と赤松との中間性のものである。この種の中間性の松は日本にも中國地方に産するが、黒松程に賞せられぬもので採集も少なく現在盆樹としては比較的に少ないであらう。この朝鮮松は梢の密茂する特徴がある、これは後に培養摘芽の項にて詳述する。

赤松は潮風に堪へないが、黒松は多く海岸地方に自生してゐる。種樹としては、孤島或は半島等常に潮風の強く吹き荒るゝ所に生じ、自ら短矮なるものを採掘せらるゝのである。其古くより知られたのは、知多半島の知多松と鹿島灘に面する所に生づる鹿島松である。又四國の諸所及、瀬戸内海にも生づるがこれは俗に株松と稱し、燃料として年々其枝梢を刈り取られ、自然に短矮太幹となりたるものを採取せるもので現今新木としての大半はこの株松である。然し名松となる資格

は、これ等の人力に依て縮められた疵物でなくて、百餘年を經ながら天然に生長をはゞまれたるものでなくてはならない、これ名松の名松たる以所である。

黑松新種の採取の方法は、其土地々々の狀況に依て異り、又根付け取扱ひは專門的經驗と技術とを要するものであるから茲には省畧して、直に培養の方法に移る事とする。

白砂青松は吾松樹國、日本の海岸一帶の美趣である。黑松が海岸の海氣を含んだ空氣と、乾燥した砂丘の上に蒼々と生ひ茂つてゐる其性狀を考へて、盆松培養の法としたならば、黑松盆養の要訣を得たものである。

用土は、砂がよい。一分位の荒砂を鉢底に入れ、微塵粉を篩ひ除いた齊一の砂を以て而も硬く押しつけて植え込むのである。然し幹枝を太らせ尙生長を促進せんとするものは、眞土粒或は赤土粒を五分程混用するがよい。そして如何なる場合にも盆土の濕氣の過多を厭ふ。灌水は注ぐに從つて吸收せられ快適に鉢底へ拔けて餘水を滯らしめぬ樣に植え込む事が肝要である。くれ〴〵も注意すべきは松の盆土は過濕ならざる事である。然し濕氣と水分ある空氣に適する如く、朝夕は樹頭より水をどん〳〵注ぎかける、所謂葉水を注ぐのである。

肥料は餘り多きを要せない、樹勢の普通のものは、油粕の塊を兩三個一年二回も其盆土の上に置いて、日常の灌水に依て不知不識の間に、盆土中の養分となる方法で充分であるが、樹勢の衰へたもの或は急速の生長を望むものは春季に、動物質の腐熟した水肥を與へ、或は盆の周邊に鰯の少片を埋め施す事なども行はれてゐるが、概して他の花木實物雜木物等程に施肥するを要せない。樹勢を大いに揚げやうとするには秋季に多肥を與へて、翌年の芽を强大にする方も行はれるが、又別に一新法として枝葉の密茂法を後章に述べる。

置場は風通しよく、日射のよい所に置かねばならない。日蔭、無風の場所に置けば、綿虫は芽を侵し、紛虫は葉に群り着き虫の害のみならず葉は青菜の如く柔弱となり、凛とした松の雄々しさを失ひ、遂には下方の枝より次第に枯れ僅か一年の間に見る影もなくなり果つるものである。

植かへは、春季を第一とする、俗に春の彼岸は松の投げ植え、と云ふて一番安全な時とされてゐる。即ち冬眠から覺めて樹液の漸く動き出した時がよいのである、處に依て氣候の差があるから所變れば時變らなくてはならない。

盆樹は毎年一回の植かへる事が普通に思はれてゐるが、松はそれには及ばない、

黑松も三年或は數年其儘でよろしい、除り植えかへを行はず鉢に根が回り切つたものは、葉梢が疲れの色が見ゆる、此場合には必ず植かへを行はねばならない。松の根は曲折多く、根皮は環狀に橫裂する性質があるから、舊土を除く時に必ず手荒く扱つてはならない又根に手の直接觸る事を嫌ふものであるから、竹箸の如きものを以て靜かに端の方より壞し落し、大半は其儘止め置き永く空氣に晒さず手早く植え込むべきである。 松の根は其先端が綿の如き根となりそれより水分を攝取するものであるから、普通の雜木の如く根を切り込む事は不必要である。

松の梢の徒長を防ぎ且つ密茂せしめるには其徒らに伸長する力を分割して多數の芽とする事である。 水が多ければ伸びは短かい譯である、松は他の闊葉樹の如く切り込めば胴吹きするものと異り、一梢頭一芽であるは仕末が惡い。 然し朝鮮松及四國産の一種には葉さへ殘して切り込めば其葉腋より發芽する種類もある、これは枝伸びを自由に防ぐ事が出來るのであるが、普通の黑松は不可能なことである。

松枝の徒長したものは從來伸びた枝を剪除し、短き懷枝を殘しこれを育てゝ一端くづれた姿を、矯正されてゐたのであるが、近來四國方面の專門培養家に於て研

究せられた良法が有る。從來は新芽の稍伸びたる時其基部數葉を殘して摘去して徒長を防いだ、此法に依ると强勢な芽は夏季側芽を出すが、所謂二番芽であるから不齊貧弱を免れない。又過つて芽の基部より全部を取つた際は、其梢は枯れ落つる事さへあるのである。

一梢萬芽法とも云ふ、强く揃つた芽を無數に出す法は、先づ春季の發芽は其儘にして伸ばさしめる、然して樹勢を盛んならしめる爲めに肥料を多く與へ、水を少なくして、梢葉に力を充實せしめるのである、かくすると盛夏の頃には新梢は伸びるだけ伸び固まつて、愈々松は明年の準備に移り新梢の頭に芽苞を作らんとするのである、此時期は先づ九月初旬、嚴格に云へば九月三日より十日の間である、此際をはづさず、本年の新梢を全部剪除するのである、實に冒險の如く思はるゝが、將に明年の芽を新梢頭に準備せんとし樹勢勃々たる時であるから、其勢は何處かへ出でなければならん、止むを得ず舊葉腋へ不自然ながら無數の小芽を吹き出すのであるが其時將に秋風訪れて芽を伸ばすには遲そすぎる、玆に其芽の力は抑止せられて明春を待つのである。此法を行つた後は、葉の大半失つたのであるから從つて水分の必要を減少するものであるから、極めて注意し必ず水を少なく與ふる事で

ある。施術の直後の雨日は軒下に入れて過濕を防ぐ位にしなければ、根腐れを生ずる虞がある。又、不自然に多數の芽を準備した事であるから養分は最多く必要であるから、秋季の肥料は普通以上に與へ力を付けなくてはならぬ。

此法を最も適當に行へば、翌春は細枝簇生して想像以外の出來ばへとなるのである。

此法は二年連續して行ふ事は不可である、翌年の芽は其儘伸ばし、長過ぎるのを摘度に摘去し置き、尙更に蜜にせんとするならば、其翌年に再び行ふべきである。

黒松中、錦性の松がこの方法を行ふてよく効を奏し、普通の松では成績の顯著で無いものがある。

黒松は豪宕雄偉が特徵であるから鉢は線の強い、無釉物、南蠻朱泥の如きものが調和する、釉藥の掛かつた美しいものは、男が白粉をつけた樣で變である、然し海岸の松などを偲ぶ姿態のものは、白交趾の淺盆へ入れて、白砂靑松の感じを出すなどは例外である。

そして、樹に對して比較的小形の淺盆を用ゆる事が培養上好成績を上げる、要するに松は多く水を要せないためである。

赤松

一般には松と云へば赤松と思ふ程なのに、現今の盆栽には赤松は珍らしい、明治二十年前後迄はやはり松と云へば赤松であつた。それ程赤松全盛だつたのに今は昔、今日では殆ど影を沒し僅に其の時代より變らず培つてゐる舊家にのみ殘つてゐる狀況であるのは何故であらうか。

赤松は松としての趣味は五葉、黑松の遠く及ばない別な雅趣をもつてゐる。皮肌が赤味を帶び小さく龜裂して自ら盆栽として調和し、葉は細く色は明快なる綠を呈し、枝も細く柔かい。そして秋末枯葉を蓄へ、風なきにはらはらと落ちて鉢に棚に落松葉の風情を味ひ得るはこの松ばかりである。かくの如き優れた點を有ちながら赤松の次第に少くなりつゝあるのは、其原因は煤煙に抵抗する力が最も弱い缺點があるからである。

樹木の內で煤煙に堪へ得ないのは杉を第一とし、次には赤松であらう。東京でも上野公園には澤山あつた杉が皆枯れてしまつた。東京近郊でも、人家が稠密するに從つて杉は育たなくなる。次に赤松も次第に衰へて僅に餘喘を保つに過ぎ

ない。赤松は面白いがどうも育たない、これが都會に赤松の喜ばれない第一原因である。

それから第二には、赤松は枝伸びがして困る。と云ふのである。なる程黒松の如く枝の中途から副芽を伸ばすと云ふ事は無いから、培養の仕方に依て放任して置けば枝は伸びて樹容は壞れる。

然らば培養如何、地方の空氣のよい所では最簡單である、砂植へにする事、二三年乃至は數年間植替へぬ事、水を他樹種の程頻繁に注がぬ事、肥料は多く與へぬ事である。これ程簡單な培養法が又とあらうか。赤松は盆土が過濕なれば必ず根腐れとなるから粒の揃つた細砂で植へ込む事である。灌水の過剩の場合は快く排出する樣に植込むべきである、眞土も腐葉土も混へるなれば僅にして止めて置く。

日光と風通しは充分に欲しい。水は眞夏を除き乾いた時に注ぐ程度でよい。常にジメ〳〵と盆土を濕らせぬ事、寧ろ乾き過ぎた方が安全である。

肥料も濃厚な物を與へれば、赤松特有の綿の如き鬚根が腐れて却て樹を弱らせる。赤松には春季一回、鰯を埋めて良果を收めてゐる人があるが、これなどは最もよい方法であらう。それは鉢の周圍に二三ケ所細剉したのを埋めるに過ぎない。

水肥を施すなれば極めて薄いものを、盆土のよく乾燥した時に一年數回施す程度でよい。

都會地に於ても同様でよいが、植土としては砂へ赤土粒を三分程加へるがよい様である。

煤煙の害を避けるには、力めて朝夕葉水を多く與へて葉を洗ひ、常に清くして置く事である。甚しい煙害地で無い限りは盆養に堪へ得るものである。

枝伸びを防ぐは、樹の勢を盛にして置けばそれを防ぎ得るゝ、一寸矛盾した言の様に思はれるが、樹勢の強いものは新芽を勢よく伸ばすから、六月中旬に其芽の下部一二分を殘して剪除するのである、樹勢のよいものは其側より數本の第二回の芽を出して、枝は密茂する、然し樹勢の衰弱してゐるものは、春漸く出した新芽を摘み取ると、そのまゝに再び新芽を出すどころか其梢は遂に枯れるのであるから芽摘みをすることが出來ぬ。枝伸びを防ぐに樹の勢をよくして置けと云ふのは此點である。

かくの如くすれば、一年に二三分の梢頭伸長を見るばかりであるが、それでも伸び過ぎて樹容の壞れた場合は切り替へを行ふのである、それは懷の短い枝を外に

出し徒長枝を剪除するのである。かくの如くすれば、小枝は伸びず。主枝や幹は年と共に老貌を呈し所謂『老龍鱗』の風趣を盆上に現出し得らるゝのである。

植かへ其他は黒松に准じてよい。赤松は海岸と寒地とを除けば、日本到る所にある。柔かく愠しく、然して厳として侵し難い風格を具へ日本のあらゆる景色を飾つてゐる、この赤松のさま〴〵の面白き姿を吾盆上に捉へ來つて坐右咫尺の間に賞愛することは又樂しい事では無いであらうか。

私は又近く赤松の盆栽が昔の如く、盛に愛賞せらるゝ時が來る事を信ずる。

五葉松

黒松の厳として雄々しき武人の姿あるならば五葉松は優雅な殿上人と云ふ様な趣がある。五葉松は十數年前初めて盆樹として現るゝや夙風の如き勢を以て流行して忽ち盆樹種中屈指の地位を占めてしまつた。

一言にして五葉松と云ふが種類は澤山ある、葉の長大な朝鮮五葉、高山の偃松な

ども五葉松の部であるが盆栽としては不適當である。盆樹として喜はれ且つ適當なものは所謂「ホンゴエフ松」であるこれにも四國九州及本州中部に生ずるものと本州中部以北及北海道の西南部に生ずるものとは一見其種類が異つてゐる事を知らるゝが、同一地方に有りても詳細に觀察すると葉性、樹皮等に多少の相異あるものがある、細別したならば數種に分類出來るであらう。盆栽としては其何處の產たるを問はず、葉が細短で密茂する性質を具へ、樹皮の荒びて古色を出すものを良しとしてゐる。

近時五葉松愛好の隆盛より、苗より養成するものが澤山現れてゐるが、名木は山地自然の種木を培養したもので無くてはならない。五葉松は、黑松、赤松なぞと異り概して高山地帶に自生するものであるだけに、其新木の採取と根付けとは實に困難なものである、これは眞柏の採取困難と同じで、老木、古木程枯死する率が多い卽ち五葉松名木の尊い以所である。

培養は黑松と殆同じでよいが、只新芽の摘除は其新梢が伸び切つた時に徒長せるものゝみ基部數葉を殘して剪除するに止めたい。

又前述の如く高山に在つて常に霧の去來する所に生を保つものであるから、日

常の管理も其心持を以てするを要する、夏日夕陽の傾いた頃に噴霧器を以て露の滴る程葉水を灌ぐ事なぞは最合理的な所處と云はれやう。

肥料も水も多過ぎる事は最避けねばならない。殊に新葉の伸びつゝある時に多肥多水は葉を長く伸ばし折角の良い葉性も爲に惡化する事がある、幹を太らしめるために肥料と水を多くして培養した木に葉が二寸以上も伸びたものを見受くる事が屢々ある、觀賞するための完成樹の保管には心すべき事である。

梅

梅花は玩弄の花でない。敬し仰ぐ可き花だ。君子の花だ。

君子は馴る可きでない梅は正しく君子の花だ。

梅花獨り東洋に稱贊せられて西歐に顧みられず。東洋は君子の國で西歐は然らず。恐らく梅は遂ひに西歐人に解せられず東洋に自尊せん、紅毛碧眼の徒輩に賛せられざる何の慮ふ所かあらん。

君子は贅せず。

梅花は其香を獨り暗中に放てば夫れでいゝ。

知る人ぞ知らん暗中の梅花よ。

と植物園の松崎直枝氏は云ふてゐる、梅をよく語つてゐる。

盆栽樹種で何が一番其鉢數が多いかと云へば、松か梅か。梅か松か。恐らく梅の方が多からう。それ程盆栽としての梅は一般の愛好に投じてゐる。古今の詩歌を見ても、盆松の文字は尠いが『盆梅』はうるさい程使ひ古された言詞である。

然し現代の栽界に於て梅の代表的名木はどれか？と問はれても、五葉松でも、黑松でも、眞柏でも一簾の盆栽通ならば、誰の何々と十指の指する所は大體歸する所があらう。然し梅に到つては實に混沌として判じ難い。これは獨り筆者のみでは無からう。梅多し梅の名木は少なしである。

種類　盆梅としては、何と云ふても野梅がよい清節高雅梅の品位自ら備り花猥り多からず、雪白の葩も佳香の高く芬るもよい。其幹の粗朴自然の老木の貌を備へるもよい梅としての特徴をよく備へ、少しの艶も媚もない。清楚其のものは野梅である。高雅を尊ぶ盆栽として野梅が歡迎さるゝのは偶然では無い。

現在盆梅にて種類物で無いものは皆野梅と呼ばれる傾向がある。然しこれは所謂『野梅性』を卽ち野梅と稱するのであつて、眞の野梅は尠ない。

梅は支那の原產だといふ。日本にも有つたらうと云ふが其產地の何所を問はず、もし野生の原種が今其儘あるとしたなら、恐らく野梅に近いか、寧ろ野梅そのものでは無からうか。

『野梅一輪』と云ふは野梅に花が少ないこれを云ふたのである。老盆梅でも一輪も花を着けないものさへある。素朴の雅趣ある鐵の如き老幹につゝましやかに純白な花三五輪をつけた姿は、絢爛總模樣のあでやかさは無いが全く田舍の素朴な良家の人の紋附姿に比すべきである。淸楚高格を特徵とする梅に野梅の喜ばれるのは當然の事である。

野梅に限らず盆梅は白花單瓣を喜ばれる。就中知られてゐるは綠蕚梅卽ち『あほじく』である。これは野梅性中で最野梅の性質を備へ、然して花を美大にしたものである。野梅を理想化したものである。『あほじく』の名は其若枝及蕚の靑色をなし、花瓣も又靑白色を呈するに因る。これには八重もあるが、其味一重の淸操には及ばない。

又今白花單瓣でよく知られたのは三雪と云ふ谷の雪、薫る雪、二月の雪の三種と、三つ月と云ふ、田子の月、滿月、滄溟の月の三種とであるが茶青花は白花の壓卷である。

其外に種々單瓣白花はあるが大同小異である。 單瓣の淡紅物では塒出鷹、道知梅、寒陽袋、揚羽蝶、世界の圖などが賞されるが、また『道しるべ』は現在名木多くよく知られた種類である。

單瓣絞りでは守の關が最變化があつて美はしい。 これは花底より吹き上げ絞りと瓣變りが出る。 今東西共に騷がれゐる『思ひのまゝ』は『日月』を改稱したものである。 紅筆は絞りと云ふよりは口紅と云ふ方が當る。 紅蕾の狀は筆の如く尖り瓣端に紅を有ち又開いた瓣端に口紅を染める粹な花として知られ名木も多い。

單瓣紅花は、白花を多く野梅と云ふ如く紅梅で片つけてゐるが、折角の種名が次第に忘れられるのは殘念の事である。 緋梅、寒紅梅等は特異性があるから誰も知つてゐる事である。 其他盆梅中でよく知られたのは佐橋紅、大盃、紅葉狩等で單唐梅もやゝ淡いが紅梅の部である。

八重咲にも現在名盆栽に多い。 白に八重もあるが、この重瓣物は美花が特徵で

あるから色物、絞り物が一般に喜ばれる。揚貴妃、蝶の羽重、灘波紅、幾夜寢覺、摩耶紅、唐梅等なか〳〵多い。

早咲物では秋から開く八朔梅、と云ふせつかち物がある。其他冬至梅、初雁梅、寒梅などあつてさきがけてこそ色も香もあれで、今では盆梅と云へば早春のものと云ふより嚴冬正月のものとなつてゐるが、然しほんとうのよい花は溫室咲物では見られない。梅花節卽ち紀元節頃から眞打の花は咲き出だす。今の暦では梅は『三月の花』である。

梅の種類のことを列擧してゐれば、それだけで一卷をなすに足りるだらう。然し現在盆梅としては以上位で一通りは盡したのであるから、次は培養に移る事とする。

梅は乾性樹である、日當りよき乾燥地を好み、陰濕の地は生育しない。

盆梅も其心持ちで培養せなければならぬ。

花を早く見やうとするものは別であるが、寒中も溫室などへ收容する必要は無い、根も少しは氷つてもよい。軒下に置けば充分である。そして二三月花を賞したなら、殘花は見切つて摘去する。その頃から葉芽が漸く萠へ出でんとするから

直に植かへを行ふのである。舊土は六分程落し、根も老根を剪去して勢よい新根の出づる様にする。關西及名古屋方面は砂七分、眞土或は腐葉土三分位を用ひるが、關東では眞土五分砂三分、腐葉土、或はトブ土二分位を混用する。何れも微塵を篩ひ去つた細粒である。梅にかゝはらず西は砂を、東は土を用ゆる傾向があるがこれは實驗の決果でどちらも好い方を採用してゐたのだが、其據て來る理由の何たるは詳にしない。要するに風土か空氣中の濕度に關係するのであらう。

植かへ後十日程經てば根が活動を初めるから、此頃から肥料をどん〳〵與へる。然し肥料が多い所へ根が終日乾かぬ様では、忽ち根腐れを起すから多く水と肥料を與へよく乾くのが梅培養の要諦である。

そして入梅中は施肥を中止し、其後は薄肥を秋迄に二三回與ふればよい。

肥料は何がよいか？本來は痩土に甘んずる様であるが梅は盆栽としては肥培するを要する、正月の安物を澤山に培養するものは、人糞をどん〳〵使用する、それが一番効果がある様であるが、名木に人糞は少と恐入るから、不潔で無い肥料にしたい。

普通油粕が使用されるが、油粕を基肥とし、これに動物質を混用するがよい様で

ある。勿論油粕と共に水肥として腐熟したものでなければならない。それには錫などを投込むもよい。肉骨粉もよい。魚粕類もよい。入梅前は御馳走せめにするのである。

置場は、炎天强光の直射する所、又風當りのよい所が出來がよい。即ち屋上など梅に適する。

かくすると新枝はよく伸びるが、花を澤山にもつ枝は徒長せない。徒らに伸びる枝には花が少ないものである。さりとて芽の固定せない内に剪定すれば、其先端一二芽から孫芽を又出して見苦しくなる。そして秋前に切れば、花芽となるべき芽も又枝芽と化して孫芽を出すから花芽が固定した秋迄は徒長枝も剪定せぬ方が良いのである。

新枝に針金をかけるはやはり十月頃であるが、近時盛に行はるゝ梅枝を波の如く曲げる事は、梅の特徴の破壞で感心出來ぬ。恰度モダーンガールが髮にアイロンを當てゝ直くな髮をわざ／＼縮らせるに似て嫌惡な感がする。樹姿整頓の上に止むを得ない枝以外は、其頸瘦の味を失はせたくない。

へつらはぬ枝の强さよ梅の花　　梅舟

老幹枝を矯め幹を手術する様な大技巧を施すはやり二月下旬から三月の初めに行ふがよい。此時ならば枝は半ば迄折つても癒着するものである。

接木を行ふ季節は古書には節分の十日前後などゝ見るが、東京を標準とするならばやはり二月下旬、即ち節分十日後からぽつ〳〵初めるがよい様である。此頃貴品珍花が次第に絶滅せんとしてゐるせめて接木にしてなりとも良種の保存をしたいものである。

梅の培養は大體これで盡くしたが、梅培養家がこの廿年前より惱まされ、其爲め一時梅の盆養は不可能と迄され東京にて有名な大培養家は、皆梅を見限つた事がある。

それは梅薫蛾幼虫、梅の芽喰毛虫である。これは俗に『赤はら毛虫』と云ふ、腹部紅紫色背部に黒條斑と粗毛とを有する。成虫三分位の小毛虫であるが、これが早春芽を片はしより喰ひ盡し遂に枯死せしめるのである。この幼虫は六月中旬黒き蛾となつて飛び、梅の葉裏へ産卵するのである。

(この虫の事に就ては、盆栽雜誌(七卷七號)及(八卷十號)に詳述してあるからそれを參考にせられたい。)

簡單に驅除法を述べると、秋末から早春二回程梅の芽のまだ堅い內に、稍溫かい室にとり込み虫の蠢動を促し置き、强き殺虫劑を枝及幹へ强力な噴霧器で灌注するのである。瓦斯を以て驅除法を行へば申分は無い。此虫は晝間及寒氣の時は樹幹の裂目などにかくれてゐるから、驅除に困難なのである。其外の害虫は鐵砲虫、あぶら虫などを除けばよい。

眞柏

眞柏は植物學の方では柏槇と云ふが、眞柏はその柏槇の中で最も葉性が良く盆に適するものゝ稱であつて、今では一般の人にも眞柏に云へば解るが柏槇と云へば解らぬ人が多からう、それ程に眞柏は盆栽に依て世上に紹介せられてゐる。

眞柏を又神柏とも圓柏と云ふが一般には用ひられてゐない。

眞柏は何と云ふても盆樹の中で松と共に横綱格であらう、眞柏には雅味とか、四季折々の變化と云ふ様な情趣に乏しいが豪壯とか堂々たる偉貌とか、四時不變之綠などが喜ばれる。そして又眞柏の長所として喜ばれるは。其幹の老樹の趣を具へてゐる事と葉が細かく盆樹として調和のとれてゐる事である。かくの如く大體に於てよい素質を備へてゐるだけに、これが圓滿具足し、根、幹、葉の三調子揃つた名木は少ない、即ち眞柏は雜木類の如く小手先の技巧が利かない爲である、ジン付の古木、舍利の老幹などは如何に老練家でも他の樹の如く自由に曲げたり伸したりする事は出來ぬ、即ち天然眞柏の尊い所以である。

眞柏の產地は殆ど日本全土に亘つてゐる。南は九州より北は千島の端までに及び又朝鮮にもこれを產する。かくの如く其葉性こそ各々特徵があるが全く全日本中に點在してゐる。就中古來最も知られたのが、四國の石槌と劍山とである が今は全く採り盡してしまつた。これに次で有名なのは、越後糸魚川である、現在眞柏の產地と云へば直に糸魚川と誰でも云ふ。大體に四國性には及ばないが葉性と云ひ、幹肌と云ひ現代では產地中第一に押されるのは全く其性の良いためで

ある。盆栽界では直に越後眞柏と云ひ叉越後から產する如く思ふが、ほんとうの產地は、西頸城郡小瀧村の共有山「明星山」又の名「明神岳」なのである。海拔は漸く五千尺にも及ぶまい。叉山石灰岩質の斷崖でその岩峭の破れ間に根下し千古跼踏して尺に盈たないものを採集するのである、この明神岳に限らず眞柏の山樹は皆かくの如き所に產するものが最も幹堅く樹皮良く、葉性優れてゐるのである、從つてこれを採集するには、眞に命がけの仕事である、通常數人一團となつて其操作に從ふ。先づ團體中の腕利きが、數百尺のロープに身を委ねて斷崖を下り、石を穿ちて採集するのである、名種木を捜索するのにさへ困難であるのに身を空間に置き命掛けで氣長に岩をコツ〱と碎くのであるその冒險なること聞くものゝ血をそゝるを禁じ得ない。

　ところでかくの如く岩の破れ目に深く〱根下してゐる樹を無理に拔き取るのであるから細根などの有らう筈が無い、漸く一二本申譯に根を存するのみのものを、根つけるのであるから、殆ど挿木をすると同じである、採取種木の大半は枯死するのが常である。種木は老木程根付かないと云ふ、其筈である、それは一言にして解決出來る老木の挿木の活着せないと同理である。眞柏が共通的に根張りの

不良なる缺點の有るのもこの理に依る事で老木の「とりき」をしたものが根張りのよく無い事は一見玄人で無くも見解け得らるゝ通り「岩硝の龜裂の間から抜き取つた木に完全な根張を望むのは無理な事である然し長い持ち込み品に完全な根張の出來る事は勿論である。兎に角眞柏の名木は速成出來ないゴマかしの出來ない「所にこの樹の眞價が存する。

越後でこれに次での産地は黑姫山である「糸魚川の取り盡された後はこの山から盛に出る事であらう。

從來葉性の最も良かつたのは大和と紀州との境界の山脈から出たものである、これは量は少ないが其性は從前眞柏中の最優秀なものであつた、殊に其ジンの硬い事が勝れてゐた現在養成樹の種はこの大和のものを挿芽して養成したものが多い、これは如何なる場合も杉葉を出さない「學名柏槇中にての一變種とも云ふべきであらう。

葉性の事に及んだから序に樹性「葉性の事を述べて見やう。

從來北海道眞柏と稱し、又島物と稱し千島方面から掘るのは其葉性が疎大で下等品とされてゐる、然し、安田氏の實驗に依れば、葉性は矯正する事が出來る、千島方

面天然の產樹は葉は太く長く伸び且つ密茂せない、そして、深摘すれば直に杉葉と化して、庭園樹などによく用ゆる「イブキ」の如くなるのが常である、然るにこれを盆養して活着したものを、一度深摘みして一端全部杉葉を出さしめ、然る灌水を手加減して丸葉を出さしめれば其新葉は四國性と少も異る所なく細く短く密茂するものである事は事實が證明してゐる、然しこの換葉法を完成するには少くも四年を要する、氣長の培養家で無ければ到底企て難い事である、一時的急成賣品主義の人々にはこんな面倒な事は出來ぬ、やつぱり眞柏ば速成不可樹とでも云はふか。

かくの如く其葉性のみは年月をかせば矯正出來るが樹皮はどうも矯正出來難い、柔質の皮が後から後から生ずるのがこの北方產樹の特性である、岩峭の間に風雪と戰い千年の劫を積んだものとはやつぱり詮方の無い相違がある。

これと同じく生籬や、庭樹として養成した眞柏にはやはり樹幹に其苦勞が無く面白味が無い、眞柏ばかりでは無い、五葉松でも同じで天然に苦勞して育つたものと養成して御馳走澤山で伸びろ〳〵で太らせたのとは自ら異る所が有る。　それも、生れるから鉢育ちで出來上つたものには一種の氣品が有るが、垣や庭から拔取つたのには、それだけの缺點が有るのは止むを得ない。

天然產では、紀州產は四國性と同じ優良である、又九州では平渡、古太島の山等から產した、又日向と大隈方面の山中から四國性に劣らぬものが出たが、やはり石槌と同じく取盡された、東京に最近くでは秩父である、やはり取り盡されたる傾が有るがまだ〳〵相當に出る、中部地方では東駒ヶ岳の一部から產するが一般に知られてゐない東北方面では有名な產地は未聞かない、北海道では到る所に眞柏山が有るが、四國及越後方面の如く專門の採集業者が無いから種木として生產するに致らないが、千島では彼の色丹島は有名な眞柏島で全島悉く岩硝から成り蟠屈した小眞柏と落葉松を以て全島を被つてゐるが、採集を嚴禁されてゐるから、禁斷の御神木と同じである。

山より採取した新木は山苔水苔などで嚴重に根部を包んで持ち歸る、そして一夜はそのまゝ水に浸して翌日丁寧に根を洗ひ、それを箱に植へ込むのである、鉢は新木活着には何故か成績がよくない。

先づ底に荒砂利を入れ、次第に上方になるに從つて細砂を用ひる、砂は皆よく洗滌し土氣の無いものとする、そして、植込んだ上部は水苔を以て覆ひ、尙又幹も枝も全部水苔を卷くのである、又葉の餘りに多過ぎるものは適當に剪除するのは勿論

である。

其後の手當は、無風の簀下に置き、一日五六回以上葉水を與へ常に葉が濕潤してゐる樣にし、夜間は簀を拂ひ充分夜露を當らしむる。かくの如くして少しでも新根が延びて活着の徵しを現せばもうしめたものである。それから凡一年の間は葉水で保たせて次第に樹勢を旺にさせるのであるが、雜木などと異り隨分手ぬるい仕事であるが十年完成を期する盆栽培養から云へば、これも一つの樂みとして見込のある品は完成品と同じに賣買されるのは面白い事である。

持込んだ眞柏の培養は實に易々たるものである。水は雜木類に比して少くてよい盛夏の頃でも特に乾く日の外は充分に與へれば朝夕二回でよく、春秋乾かない時は一回でもよい、常に土が僅に濕氣を保つ程度が理想である。從つて植土は砂を多く用ひ土は却て少し混合するのがよい、砂を多量に用ゆる事は卽ち水拔けをよくし餘水を排出するためである。そして新芽の伸びる頃は殊に水分の過多を注意せなければならない、伸び過ぎたと云ふて深摘みすれば必ず杉葉を出すものである、一端杉葉を出せば回復迄には二年を要する。杉葉の出た眞柏は全く觀賞的價値を缺く事は云ふを要せぬ。

又日光と風とが少ない所に置く時はやはり葉は徒長して本來よい葉性でも見惡いものとなつてしまう。

鉢は樹に對して大きなものよりは稍小さい淺いものがよい、それは水の調節をよくする爲である。

肥料は相當に與へ成長力を強め、それを日光と風當りとに依て抑制し、葉を細く短く密生せしめるのがよい、此場合鉢土が凍結するため鉢の破損する事が有るから寒中も屋外に置く方が柏眞培養の最も當を得たるものである、持込んだものは寒地では藁莚の類を以て鉢を覆い置けば安全である。

害虫は比較的少ないが粉虫や綿虫が着く事があるから晩春から初秋迄月一回位は豫防に驅虫劑をかけてやるのも良い事である。

以上は自然産山木の事であるが、近時眞柏は盛に挿木を行はれ養成樹が澤山ある、これは最葉性のよきものを撰び、一二寸の小枝を挿すのである、時季は何時でも活着するが春秋の二季が最もよい、深さ二寸位の鉢に細砂を入れこれにやゝ斜に一寸程挿し日蔭無風の所に置き葉水を度々注ぎ其發根と共に次第に日光を強めるのである、丹精三年の後には愛すべき小品を作り上げる事が出來、又石付などに

する時は雅致あるものである。
眞柏の現狀は內地に於ける天然山木は近い將來に取り盡される事であらう。其時は北海道、及朝鮮金剛山あたりから求めこれを培養法に依て葉性を矯正するより外に道はあるまい。柏眞葉性の研究は今後の盆栽界に實に重要な問題である。

蝦夷松

蝦夷松が初めて盆樹となつたのは明治四十一年頃である。此頃は北海道の檜前山から掘り出されてゐた、其後大正四年に至つて現在盛に產出する、千島國後島古釜布(フルカマツプ)の木が發見せられたのである。
初めは蝦夷松は必ず枯れるもの、盆樹として不適當な樹種とされてゐた、それが培養の研究が出來て今日では最强く培養の容易なものとなつたのである。
蝦夷松の鑑賞上の價値に到つては玆に贅言を要せぬが幹も、葉も、大體の姿態も

盆中に大木の風趣を捉ふるにこれ程よい要素を具備した樹種があらうか。大正八九年頃から次第に栽界に認められ、既に蝦夷松時代を現出せんとする狀況である。

蝦夷松の持込物の培養は至極簡單である、東京以南の温地では盛夏に西陽を避ける所に置く程度で根は常に松や眞柏の程に乾かない樣水分を與へる事、二年に一度程は必ず植かへを行ふ事、春季新芽の伸び過ぎは摘除するのであるが伸び過ぎたる場合は新芽の全部を取り除けば翌年は胴吹き芽を生じ枝梢一層密茂するものである。

冬期は屋外の日當よき所に置くが安全である。屋内或は温室中に收容するよりは、却つて屋外に置いた物の方が一齊に美はしく發芽するものである。

植付の用土は眞土、砂、腐葉土の微塵を除いたものを等分に混じて用ふるが成績がよい樣である。

肥料も撰り好みをせないから春、秋二回油粕の碎片を置く程度で充分である。

持込み物は石付などにしても丈夫に育つ事は松や眞柏と同じであるが、灌水の回數は多くしたい。

又葉水は最も好むものであるこれは常に濃霧の去來する所に自生した習性が殘つてゐるのであらう。

次に產地の自生狀態を述べて盆養の參考とし、尙新木の取扱ひに就て記述して見やう。

千島から來る原木は一年に何千と云ふのであるが餘さず、何處かへ納まつてしまう、これがどうなつてゐるのであらう。三四年前迄は新木の活着するのは十本に一二本とされてゐた、然るに此頃では餘り持ち廻したもの、輸送に不注意でムラシたもの、又乾かした物の外は十本中七八本迄は活着させる樣になつた。

これは產地の人々の根付け法と、培養家の取扱ひと兩々の硏究の出來た賜である。

蝦夷松は、水苔の堆積した濕地に產するもので、彼の地ではヤチシンコと云ふ、卽ち水苔の濕地に生ずるシンコ松と云ふので、普通材木となる蝦夷松と同種であるが濕地で、地下三四寸の所には地熱が低くその爲根は活力を失ひ、上面に纖細な根が生ずるそれに依て漸く生を保つのである、蝦夷松の新木は其採取した切口を見ると上部より却て太い事がある、それ故大木などが倒れて、其枝が自然に發根した

卽ち自然の厭條だらうとの說が數年前迄行はれてゐた、然し實際に付て研究して見ると、前記の通り、水苔は所謂ツンドラとなつて次第に堆積して其層を盛り上げる、此所に生じた蝦夷松は地熱を逐つて次第に上方に發根し下方の根は其働らきを停める。その爲僅な根に依て生命を保つのであるから生長は殆ど遲々たるもの、又五月迄は地の氷は融けず十月には霜を結ぶため生育季は極めて短かい、其上に此盆栽樹の有る所は絕へず强風が吹き通すのであるから何百年の星霜を經ても、尺に盈たない短矮な姿でゐるのである。

新木の根部を見ると水苔が纒結し、その間に細根二三條が有るのみであるのを見れば、大體産地の狀況は想像し得られやう。

蝦夷松の採取は地表の氷の解けた五月下旬から、七月中旬迄に行はれたものが安全である、秋季に採取したものは如何に丹精しても必ず枯死する。新木を求めるには春取なるや否やを見るが第一條件である。山の自然のまゝの葉は太く其先に細き里葉のあるものは、一年根つけを行つたものである。

東京へ輸入されるのは現今では秋の十月中が、第一の好季とされてゐる、春採つて根付けて置いたものを根卷きして來ると、寒い所から氣候の暖かい所へ運ばれ

るので凡一周間の旅程(?)の内に其温氣で巻いた水苔の中へ、新根を出すのである、根包の「コモ」や「ボロ」を解き水苔を除て見て新らしい、白根の數條が出てゐない樣なのは活着の見込みが無いと斷言出來る。其新根も出るは出ても持ち回されて活力を失つたのがある、これに致つては十本十死であるから、其新根の活力の有無を見極めなくてはならない。

植付けは其儘南向の暖所へ地植する、そして時々葉水を與へる翌春鉢へ移すのが一番安全で簡單な方法であるが根の良いものは直に鉢へ入れても冬季注意さへすれば平氣である。鉢へ植へるには新根を損せぬ樣に叮嚀に根部の水苔を取り除くのである、原生地のまゝの水苔を根部に付着して置くと發酵し易く、又一度乾燥するとなか／＼水を受けつけない、其爲遂に枯死する例がある、水苔及原生地の土はなるべく取り除き。鉢の底へは荒きものを入れ、上部は腐葉土と細砂と眞土とを等分に混じて植へつける、そして如何に多量の水を與へても枯らずに水氣を含み餘水を排出する樣に植へ付けるのである。

かくの如く植へれば冬季の結氷季節を除き、如何に多量の水を與へても、其原生地の水苔の多水地に有つた習慣に依り御氣嫌よく生長するものである。

産地から來た年は、冬季でも、日向の暖所に置けば新根の發生してゐる事を暫々見受くるが次年からは、暖地の氣候になれてやつぱり冬眠する樣である。四季を通じて蝦夷松の新木が風と乾燥を嫌ふ事は、恐らく第一であらう、それは前述の原生地の狀況から推察出來る。

又蝦夷松の新木が根のよいに係らず枯死する事がある、これは産地で根付中に殊に多くこの現像を見る、一體何による？

これは、産地では俗に鐵砲虫と云ふてゐるが、よく研究して見ると鐵砲虫で無くて膚虫部であらう。木質部と、樹皮との間を食廻るために。樹液を中斷して遂に枯死せしめるのである。

此虫は恰度米につく穀象虫と同大の甲虫である、彼の胄虫(カブト虫)を小さくしたものと見ればよからう。これが樹皮と木質部との間を食ひ入つてトンネルを穿つそのトンネルが枝を一周すれば其枝は枯死するのである。

産地で大木が枯損する、その大部分は此虫の爲だと云ふ。栗粒程の甲虫の害も又恐るべきものである。

此虫は樹皮中に潛入する爲。普通の殺虫劑では驅除する事は出來ぬ。産地で

は止むなく石油を其ヶ所に塗抹し其滲透性に依て此の虫を殺してゐるが。此れは背に腹はかへられず、止むなく使用する迄で。石油を其儘使用する害は認めぬ譯でも無からうが、瓦斯薫蒸の設備も無し詮方なく此方法に依つてゐるのであらう。

此虫の性行は未だ充分な研究が無いから今茲に詳述し得ぬのは頗る殘念であるが害虫の本體をつきとめたのであるからこれを完全に殲滅する法を究める事は今日の科學では何でも無い事である。何れ近く此の發表をする期を待たれたい。

新木を求めた場合、枝の分岐點其他に米糖の如き虫の糞の有無を驗し少しにても付着してゐた場合は其の口より尖つたもので穴を逐ふてひらき虫を捕殺するか滲透性の殺虫劑を粘土などに交へて其の所に貼付するのである。又止むを待ざれば。非科學的ではあるが石油を塗擦するもよからう。

産地では此虫の爲めに枯死する樹が三割位はあると云ふ。未だ東京其他で此虫の害の少いは氣候の爲であらうと思はれる。

新木を求むる場合には木振の盆栽的要素の有無は勿論葉性を充分詮索せなけ

ればならない。山葉は千差萬別である。疎大なものは如何に丹精してもやはり粗大の葉を免れない、密にして短矮なものを撰ばなくてはならない。そして蝦夷松の葉は通常六年は落ちずに枝に止まつてゐる。それが盆養すると忽ちに落ちて三四年間は實に見苦しい狀態となるのであるが新芽を摘除して僅に其基部二三葉を止める迄にして置くと、樹は其必要上舊葉を代謝せずに止めてゐる。山葉は快よい鮮色がある。これを樂しむは蝦夷松新木を觀賞する一法である、新芽を抑壓して置くと二年の後には舊葉の間に芽が盛に胴吹をする、此胴吹の芽が伸びた後に山葉が一霽に落ちるのである、これが新木から觀賞する最もよい方法として最近行はれつゝある蝦夷松新木觀賞の一新法である。

新木には針金をかけてはならない、針金をかけた樹は必ず枯れる、充分持ち込んで行ふべきである、どうも早く姿態を整へて觀たいは人情だが我慢が大切である、どうしても整へたければ麻繩の如きもので輕く引つ張る程度にしたい。

柘榴

柘榴は盆栽樹種中の大物である。種類も多く鉢數も多く、歷史も古い。芽出し樣々の色美しく初夏燃へる如き紅花もよく、變り花もよい、結實賞すべく、寒樹も亦風韻を具へ四時好愛することが出來る。凡二十年前柘榴の流行した時代は花を主とした珍種が尊ばれたが現今では單色の花が喜ばれる。就中

捩幹榴は其尤なるもので、次に大實、殊に南蠻大實が賞され、又姬柘榴も近時また。東西共に好愛するものが多くなつた捩幹榴は明治廿七八年頃名古屋に於て發見せられた新種であるが、其幹の自ら螺形に捩れる性質は如何にも面白く現今柘榴種中の覇王の觀を呈してゐる。

姬柘榴は朝鮮柘榴とも云ふ。變花も數種四季咲の性質を具へ、枝梢纖細で幹も自ら古色を呈し盆樹としてよい素質を具へてゐる。大實の花の紅色の美は要するに柘榴の代表であり、其實の面白さはこれに及ぶものが無い。

柘榴の品種は八重咲、千葉、絞り、咲分けなど複雜で又芽萠えも種々樣々であるこ

れを詳說してゐると數十紙を要しても尙足りぬ程であるからこれは省き培養に移る。

柘榴を冬よく枯らす人がある、それ程に寒がるものでも無いに柘榴をいためるのは冬に限ると云ふてよい、それも萠芽時になつて芽が出て來ない、はてどうしたのだと調べて見ると梢先の樹皮に皺が出來て芽どころの騷ぎで無い、觸ればぽろ〳〵と折れるのに驚くと云ふのがこの木の枯れる筋書――筋書も變だが順序である。

柘榴はもと支那でも南方の暖地の原產であるらしく、野生の柘榴もなか〳〵多いと云ふ事である、これから見ても寒さには適せないものらしい。强壯なものだからと云ふて冬期屋外に出して置けば必ず寒がつて枯れるは必然の事である、然らば屋內に保護して尙枯れるは――と云はゞ、それは前年の樹勢が衰弱して、寒氣に堪ゆる力が無かつたのであらう、東京邊では普通の力ある樹なれば、屋內に置き甚だしい凍結をしない程度にして置けば枯死する事は絕對に無いと保證し得られる。

尙又「冬」季に植かへ其他整姿等にて、樹を弄つたものは十中八九迄は枯れる、忘れ

ても柘榴は秋から早春にかけて根も幹もいぢつてはならない。植替への最も適當なのは、春八十八夜前後梅はとうに散り、櫻も葉櫻となり、いろいろの木々が芽の伸びた頃、寢坊の柘榴の芽がぽつ〳〵と赤く、綠く萠え出して來る頃を見計ひ、植えかへを行へば、これが安全第一、此時ならば根は隨分慘酷に扱ひ、幹なども、曲げても、撓めても、平氣なものであるから、思ひのまゝに矯め正すべきである。

然し俗に二段切と云ふて去年切つた所より先を僅でも殘す事、つまり去年切り込んだ根より深切りをすると枯れぬ迄も木は非常に衰弱する、此點は注意を要する。

植土は、人に依つて種々ある、要するに、肥料と水との多少に依つて、植土も加減を要する、肥料を多く施す人は腐葉土と砂と眞土の細粒を當分に混じて用ひられる、又昔より柘榴の植土は粘質壤土を以て第一とす、としてゐた、つまりアラキダ土を用ひたのである、露地等に栽植するものはこの粘質壤土にあるものがよく育つやうである。又此アラキダに更に滯土を混用するものもあるがこの用土は水拔けの極めて惡しきものであるから、鉢底には必ず篩に懸けた粗粒の土を入れなくてはならぬ。

柘榴は生育の旺盛なものであるから、植替へには根は充分に土を拂い落し、細根は大半は切り除いて差支ない、かくして植込んでも適當に培養すれば土用前迄には鉢へ一杯に根を廻しきるものである。そして其根は鉢の外側にばかりはびこるを常とするから、更に幹を太らしめ、枝を密生させやうとするには、先づ春季の植替へに稍小形の鉢に入れて土用入前後迄肥培する、そして充分根を廻し土を食い切つた時に、稍大形の鉢に、根を其まゝ入れる、つまり鉢をゆるめてやるのである、此時には、種類に依つては花を終るのであるから全部葉刈りをし新梢を摘除して再び葉掖より細梢を出さしめ、枝をつめ茂らせるのである。此法は一年にして普通の二年分の効果を修め得る柘榴培養の大秘訣である。

芽摘みの事を落したが春季の徒長する芽は摘除しなければならぬが、新梢の梢頭に花を着けるものであるから、花蕾の着くを確める迄は、芽は其儘に伸ばし、花芽を見定めて徒長枝を剪除するが第一である、然し、五月頃已に梢頭に花蕾の形を見せることがあるが、これは無駄蕾で開花を見ず退化するのが普通であるから、此蕾を見て其他の枝を悉く剪定してはならない。

灌水は充分にやる尤も肥料を多く與へる時は水も隨つて多く與へなくてはな

らない、平素水、肥料共に多量に　してゐるものが、一回でも甚だしく水切れをすれば、灌水後一時復活しても、細根の腐れを生じ發育が鈍り再び元の勢にならぬものである、然し絶へず土が濕つてゐる樣でも却て害がある。

又土用中の日中など、土の乾燥の甚だしい時に灌水するには、必ず吸み置きの溫水を葉に掛けぬ樣灌かなくてはならぬ、盆土の熱したる所へ冷水を灌ぐは戒むべきである。

本來暖地のものだけに、夏季は如何に暑つくも、簀下などへ入れるを要せぬ、炎天でカン〳〵照りつける程勢が良いのである。

櫻

國華　櫻を日本獨特の盆栽とし、萬朶の花の美を盆上に現出したならこれこそ眞に國風の粹と云はれやう。

櫻の盆栽は謠曲鉢の木にも梅松と共に出てゐる盆櫻の歷史は卽ち盆栽の歷史

となるのである。

櫻の種類は實に三百余種を數へられる、然し大別すると山櫻、里櫻となる。盆栽として自然の風趣を樂しむは山櫻で花の美を見るは里櫻である。山櫻は芽萠を樂しみ、紅葉も亦うるはしく其の名の山趣がある、盆櫻として山櫻は愛好せられる筈である。其他に

富士櫻　盆栽界で數の多いのは富士櫻である、これは富士山及其近くの山に產するのみで自然のまゝで短矮な盆養樹の姿をなしてゐる。これにも細別すると三種となり、蕚まで青白色なもの、淡紅色のもの、蕾は淡紅で開花して初めは純白で後に絞りと變ずる大輪との三種がある、就中青白は珍種とされてゐる。

寒櫻　は紅白二種ある、紅花種は緋寒櫻と稱し櫻花中で最も紅色の强いものである、原產は臺灣の阿里山である、嚴寒時に肉厚な深紅の花を開く姿は美々しい眺である。

白寒櫻は葉と共に花を操り出す、これはやはり小溫の所に置けば嚴寒中に花を見られる。

十月櫻　秋末初冬花を開き頗る珍種である、花は彼岸櫻に類してゐる、盆櫻とし

でも珍重せられる。

園藝品種　山櫻、里櫻何百種を詳說するに到つては「櫻」と云ふ一書を要する程であるから茲には省略する。

培養　櫻の培養は諸說があるが要するに用土は赤土を主用する事は異說が無い樣である、赤土七分に砂三分を混用するは總ての櫻に安全な土合せであるとされてゐる。

肥料は强烈なものを用ひず、薄肥を時々施す。植えかへは年一回春或は秋の彼岸に行ふ。夏日は烈日に晒すを避け半陰に置き春秋は最も日當よき所に置く、病害虫としては、盆櫻には少ないが櫻獨特の天狗巢病がある、これに侵された場合は其枝を直に切り捨てるのである。

虫は梅に付く芽喰毛虫(赤腹毛虫)がある、これは冬から春にかけて芽を喰い盡すのであるから注意を要する(梅の項參照)其他に鐵砲虫が樹幹に食い入り遂に枯死せしめる、樹皮に虫糞が少しでも現れた時に直に其穿口に噴霧器の口を强く噴出する樣に調節して殺虫藥液を灌注するか或は針金を以て突き殺すかするのである。其他毛虫の類がよくつくものであるから時々驅虫せなければならない。

柳

柳は綠花は紅、春の綠の代表を承るは柳である。雨に煙る風情面白く、夏日水邊の綠陰は凉味掬するに足りる。散る柳の俳味、冬枯柳の寂寥、四時自然の變り替りを敏感に表徵するもの柳に及ぶものがあらうか。

種類も澤山あるが喬木となるものと灌木性とに二大別出來る。枝垂柳、大葉柳、山柳、白柳、山猫柳、丸葉柳などは喬木となり、姬柳、川柳、こり柳、猫柳、岩柳などは灌木性である。

盆栽としては枝垂、猫柳、岩柳、山柳など趣があるが、最雅致のあるのは支那種の西湖柳と、六角堂と稱する枝垂とである、六角堂柳は枝も細く葉も細く小さく盆樹として如何にも柔かい柳の糸の風情を出す。

柳の盆養品は冬枝枯れがすると云ふがそれは培養の當を得ない爲であらう。

植込みは細砂ばかりがよい、受皿に水を盛りそれに鉢底を浸すを見るが、それは良い方法ではない一日何回でも乾くに從つて水を與へるに越した事はない、肥料

もなるべく多く與へる、水肥の薄めたのを隔日位に水代りに與へるのがよい。

かくすると本來樹勢の旺なものであるから先づ春季に昨年の枝を二三芽殘して切り込む、それから出た芽も夏の土用迄には五六尺に垂れるのが普通である。此頃になると元葉がぽつ〳〵と黄ばんで枝の伸びも停まる、其時鉢内を見ると新根が上方に向つて露れて來る、これは根が土を食い切つた證據でこの儘では如何に肥料を與へても効をなさない、それをそのまゝ翌年迄放置するから冬季枝枯れを生ずるのである。

かくの如く根が回り切つたのを見たならば直に第二回の植かへを行ふ。春と同一の切込みと植かへを行ふのである、それは遲くも土用中に行ふを要する、後れると新梢が固まらぬ内に冬が來るからこれも越冬に苦しむ、要は充分枝に力を蓄へしめ生々とした枝にして置く事である。

植かへには根も充分切り込まなくてはならない。早春新芽の萠え出した糸柳の趣を見た上で五月頃切り込んで植かへを行つてもよい。

挿木すれば必ず發根する、一年丹精すれば一かどの盆栽になる、素人でも易々と作れるのは柳が第一であらう。春季大木から切り取つた面白き枝を砂へ挿して

盆栽を自身で創作するは面白いものである。

害虫には鐵砲虫がある、あぶら虫が若芽を侵す又、青虫もつくから注意を要する。

夏も日光の直射する所に置くがよい、然し吸水のはげしい物であるから水切れ要心は勿論である。鉢は深目の鉢を撰ぶ事。

以上は枝垂性の柳である、灌木性の岩柳、猫柳などは多く石付にされる、根先の切り込み、枝の切り込みは枝垂程思ひ切つて切り込む事は出來ないが大體其心持ちで深切りして差支ないが夏時の置場は半陰にしたい。

百日紅（さるすべり）

盛夏の花は強い色彩が調和する、眞紅の百日紅の花の炎天に燃ゆるが如く、簪の如く咲きほこる姿はいさぎよい眺めである。其名の如く夏から初秋へかけて永く咲く故に百日紅の名があり、又樹皮が滑なために「さるすべり」ともいふ。

其木振り枝振りが柔かく雅味があるので古來茶人にも喜ばれ數寄な庭には無

くてならぬものになつてゐる。鮮紅色の花をつけるが普通種で、紫花の珍種があるが、殊に白花は少ないので最も珍重されてゐる。淡紫色の一種で俗に姫性と云ふ小葉の一種があるがこれは枝葉共に小模様で盆樹として適するが花つきはよくない、然し秋末よく紅葉して花に劣らぬ美觀を呈する。

百日紅が夏の花として面白いものなのにさ程に騷がれぬのは此花が夏日水のうるさいためでは無からうか。一度烈しい水斷れをするともう其年は取りかへしがつかなくなるため素人は培養がむつかしいとしてしまう、只水さへ斷らさず、日射さへよく計つてやればよいので花を持たせればこれ程永い間花の有る木も無いのだからその位の面倒は止むを得まい。又此樹は春の新芽が伸びて其先端に花をつけるものだけに新梢を切り込む事が出來ぬ、花の着く枝は伸び過ぎて此全體の形をくづす、それ故好まぬ人もあるが、培養法に依て枝をつめて花を咲かす事も出來る。先づ入梅前に一端水をきつて芽の成長を停めるのである。そして又肥料と水を與へると今度は其伸びる力は多く花芽となり土用前に立派な蕾を着ける、この法に依れば新梢の徒長を抑制する事が出來るのである。

植えかへは春又は秋末に年一回行ひ、少し深めの鉢を使用するが安全である。

鉢の色は花色に依て撰ばねばならない。白花種に白交趾を用ひたり紅花種を朱泥鉢に植へるなどは花の美観を殺ぐから最も注意を要する。用土は赤土、腐葉土の極めて粒の齊一な細粒に砂二三分を混じて用ひ、土用前に良く肥料を與へればよく花がつく。寒樹も面白いものだから斯梢を其儘ま觀賞して春季發芽前に深めに切り込むのがよい。

此花は元支那溫地の原產であるから、冬期に凍結する時は枝の枯れる事がある、室內に入れて保護するが安全である、又花後充分に肥培して樹に力を付けて置く事も肝要なことである。蟲害は新芽を刺して樹液を吸收し遂に其先端を萎ませる菊吸蟲の如きものがある。これは勢のよい花を着ける枝を冒す事が多いから恐るべき害敵である。又蚜蟲や葉裏につく木虱に似た小蟲が附いて葉を黑變させる事がある、これ等の害蟲は時々稀薄な驅蟲劑を霧注することに依て完全に防ぎ得られる。

槭樹（もみじ）

秋の紅葉の代表樹槭樹は又若葉の色をも捨て難い。盆樹では却て秋よりも春のいろとり〴〵に萠え出す若葉の美しさを樂しまれるのである。德川時代に作出された槭の品種は實に澤山なものであるが現今では其半數も傳はつてゐまいのは惜むべきである。

盆栽としてはやはり山槭が喜ばれる、同じ山槭でも葉性は種々あつて葉が小葉で梢が細く出る種類を撰擇して培養せられつゝある。此外に千染（ちしほ）、清玄、八房、板屋、一行寺、獅子頭などを盆樹として見受くる。板屋は茶人などの喜ぶもの、千染と清玄は萠芽の鮮紅なる事第一、八房は葉梢共に纎細なる點が槭中第一、獅子頭は葉に縮皺あり青葉の色が美しい。七五三は小葉の數が三ツ五ツ、七ツの正しく三種に出づるからであらう。

（品種の列擧は煩に堪へねば省略す）

昔は槭の盆栽、却々數も多く名木もあつたが現今では甚稀になつた。槭は培

養が當を得ないと枝先が太くゴツ／＼になつて美觀を失ふそのため次第に名木は失はれ、又養作する者も少くなつたのはこの爲ではなからうか。

槭の培養は其芽の力を齊一にする事が肝要である、一部分の芽は太く強く出で一部分は細く弱く出るやうでは不可ない。

それは植かへの時季が大切である、春の彼岸前後其芽が僅に膨みかける前、卽ち春陽に逢ふて僅に水を上げ初めた時が最も良い。芽が開き初めてでは遲過ぎる、萬一此場合は一年植かへを見合せてもよいから春遲く植かへない事である。

芽が伸びたならば強い芽は絶えず摘む、摘み方は元葉二葉を殘すと此度の發芽は一芽が二芽になり梢が密茂する。

枝を細く出さしむる爲めに植かへは二年或は三年に一度がよいと云ふ人もあるが、年一回植かへて摘芽と肥料とで樹勢を調節して行く方が樹が生々として美しい。

肥培して置いて土用前に一度全部の葉苅をする事は槭の梢を增す事、葉を小さくする事、葉を新鮮に秋迄保つ事等總てに効果がある、然し土用後には不可である。

盛夏は簀下に置き強風雨の時は無風地に避けしめる、そして秋迄葉を焦かず損

せずに置かねば紅葉の美は見られない、そして一度でも水切れすると忽ち葉は萎み其年は回復不可能であるから槭は淺盆で培養する事は困難である。肥料も相當與へないと葉は肉を持たず又光澤を失ふため秋の紅葉が美しくない。
針金懸けは至極難物である、枝がモロく直ぐに折れてしまう。一番よい時期は入梅頃水を與へず鉢土を乾かせる、葉の稍萎む程度を見計ひ、其全部の葉苅を行ひ直に針金をかけると、樹中に水分が少いため少しは柔かになるものである、これは某技術者が常に行つてゐる所であるから參考に記して置く。
冬は余り寒がらぬものであるが然し屋外寒風霜雪に晒したくない。又余り暖い所に置き過ぎると、何時の間にか不自然に樹液が動き出して春の芽出しが不揃になるから凍らぬ程度の温度の變化の無い所が最も理想の置場である。

楓樹（かへで）

嚴格に云へば槭樹は「かへで」である。楓の字の本態については議論があるが、こ

ゝでは通俗的に「もみじ」と別にされてゐる三つ葉に出るものを「かへで」として置くその區別は別に理論的にするを避けて從順に通俗の盆栽語に從つて置くのである。盆栽で云ふ「かへで」は葉が彼の槭の葉の掌の如く幾つにも裂けず只三つに裂けてゐるものとして置く。

（槭類にもあるが盆樹には無い。）

楓は「もみじ」に比して梢頭が太くて硬い、全體に柔味の無いのが此樹の特徴（？）である。葉は小形、肉は厚く、紅葉は最良く、夏も葉肉の厚い爲葉焦げがせない。總てに培養は容易である。

近時盆栽界に人氣を博した宮樣楓は其葉肉が殊に厚く光澤があつて紅葉が頗る美しい、それにこの種の最特徴とする所は若木に實のつく事である、槭類は盆養して結實するは老樹で無ければ望まれない、從つて珍貴であるに、此一種は纖細な稚木にも彼の風趣ある翅果を澤山付けるのである。盆栽界に初めて出た時は其れを臺灣よりの傳來なりと云ひ傳へし爲め暫く臺灣楓と稱されてゐたが後に臺灣の原産に非らざる事分明し其祖木が故伏見宮殿下の愛培品であつたため「宮樣楓」と改められ「今日では一般に通用する様になつたのである。

培養法は械と變らない、只此種は挿木の利くために繁殖容易にて械類に接木が多きに係らずこれには接木を見ない。

植物學上の楓は「盆栽界ではは別にこれを「えがふう」と云ふ、それは栗の刺毬に似た實を結ぶためで「最も要を得た俗稱である。植物分類の方では金縷梅科になつてゐる。紅葉もよいし趣味もある「盆養品もたま〳〵見る、培養法は別に特殊な手當が要らないから省いて置く。

桃

桃の盆栽は常には忘れられてゐる、然し桃の節句の近づく頃には季節物として陳列」でもしやうとする時俄に騷ぎ出すのは可笑しい。桃も捨てたものに非ず。

桃は實桃と花桃の二つに分類出來るが茲では花桃について述やう。

花桃のみでも實に澤山の品種がある。然し現代其品種名を知つてゐるものは日本に何人とは有るまい、日本園藝品の保護は實に急務に迫つてゐる。普通云ひ

習はされてゐるものに源平、白、緋、更紗、一歳、寒緋桃、枝垂など花色に依へ稱へられてゐる。

此外に甘扁桃(あめんとう)と云ふ矮性種がある、これは扁桃油を作るもの、實は扁平の異形である、盆栽には時々見受くるが、枝の少ないもので樹振りに面白いものが少い然し實付のよい爲めに盆養せられるのであらう。

一歳桃は其名の如く滿一年にて花をつける、つまり實生の翌年は開花するからである。

培養は、早春、或は秋の十月中に植かへを行ふ。腐葉土、眞土などを主用し砂は鉢底の排水に入れる程度でよい。花後よく肥培せないと冬枝枯れを生じ易い、梅に着く芽食毛虫がつき易いから注意を要する、(梅の條參照)梅は嚴寒に晒して置いても平氣であるが盆桃は檐下或は南面の暖所に置く方が安全である。枝の蜜生しないものだから剪り込みには注意を要する、針金は新梢の伸び切つて花芽の見える初秋に行へば翌春花前に除く事が出來る。

木瓜（ぼけ）

木瓜を報春花とも書くが園藝的に多くの種類が作り出されて、初冬から既に開花を續くる寒咲種も種々出來てゐる。早春野末の枯草の僅に青み初めた中に咲き出づるのは野木瓜（しどみ）の事である、これと共に庭上春來を報ずるのは、春咲の木瓜である。

何の衒氣も無い枯木のやうな枝に無造作に艶々した花をつけるのは他に見ない獨特な趣である。然しながら木瓜には亭々たる大樹の姿や壯嚴な趣などはない、此木に雄大な情趣を求めるのは無理である、季節を表徴し、色彩を助ける紅一點の役が此木の面目である。先づ寒木瓜を述べ春咲種に移らう。

春咲種　では東洋錦と稱する絞と紅白無地の咲分けの大輪種が一番美花で賞揚されつゝある。これに似て非なるものが廣東と稱する白地に薄紅更沙絞りである。此外紅、白、變り咲等十數種あるが一々列記する事を省くが特殊なものに香篆と云ふがある、これは枝が波狀に曲りくねる性質を具へるので龍鬚木瓜などゝ雅

名がある。尙又盆栽として野趣捨て難きものは野木瓜(しどみ)である、細幹に鮮紅の花をつける姿は自然を憧憬する者の心を捉へるに充分な情趣を有つてゐる。

寒木瓜　冬から早春の花は多く加溫促成せなければ咲かないのに寒木瓜は十二月から三月頃まで自然に花を開く、其花期の長い事、冬の荒凉たる時に燃へ立つ樣な深紅の暖色の花は季節の好みにもよく合致する。

寒木瓜は野木瓜(しどみ)の一種である、從つて太幹は無い、偶々太幹があればそれは春木瓜に近い花の良く無い寒木瓜である、いゝ種は十二月の初旬にはもうぽつ〳〵枝頭に花を見せる、そして三月までは次から〳〵と梢に蕾が現れて咲き續ける、よくない種類は春木瓜の少し早いと云ふのに止まり、溫度を加へて漸く寒中に開花するのである。

いろ〳〵の種類の中、紅咲では「紅司」が感じがよい花である、花瓣が深紅で純黃色の蕊が花心に群りついて實によい感じである、本來紅色と黃色との配合は美の法則に叶ふ。此花の美觀なる以所であらう。

此外に紅花で黑光、紅千鳥などがあり、白花に白瀧、白鳳、越の雪などあり、樺花に夕陽、金盃など、更沙に雲の峰、初雁等此外咲分け。覆輪、桃色、八重一重など種類は澤山

あるが寒咲きと稱するのみで初冬から自然に咲く種類は僅に三四種に止まる。

培養　寒木瓜は十月中が植かへの絶好季節である、それより一日後れれば一日の損である。名古屋方面では細砂のみを用いて植へ込む、灌水すれば籠の様に抜ける程の砂植へであるが、これは充分注意が届き水切れなど絶對にせない自信のある人々のみ行ひ得る方法であらう。又此植方は多肥多水の培養で無いと木がカセるから先づ普通は砂五分と眞土及腐葉土を五分とを混じて用ゆるが安全である。木瓜は根の少ないものであるから切り除かぬ事、細根を乾かさぬ樣注意する事が肝要。

木瓜の繁殖は挿木に依る外無い、春及秋何れも行ひ得らるがなか〳〵伸びず太らないものである。

殊に寒木瓜は太らない。露地に有つたものを盆栽にするには、其株を掘り取り、幹に少し根をつけて鉢に取り、切捨の根は其一部を空氣中に露出して置くと自然の幹の如く變化してしまうものである、實際に寒木瓜には根を幹にしたものが澤山見受くる。これは雅曲があつて長年の後には却つて面白いものとなるのである。

寒木瓜や野木瓜に立つた幹が無いから石付にすると面白い風情を出す、又其幹の細い缺點を補つて全體を力強く大きく見せる事が出來る。然し冬の觀賞品であるから大きな石に付ける事は考へものである。幹の細いのを補つて盆中力の均衡を得やうとするのだから少さい石を根が抱へてゐる程度が最も見よい。又鉢の中に添石をしてもよいであらう。

寒中咲く一種に長壽梅と云ふが有る、これは四季咲で花は甚小さく紅色が濃いため暗紅色に見える。木も矮小である珍種として尊ばれる。山陰方面の原産であるらしい。大幹の無い事は勿論である。

棗（なつめ）

果實と云へば西洋物全盛の時代である、棗の實の仙味を樂しむの士の甚稀なるは淋しい事である。

ソバ釉の色、長からず圓ならず、程よき楕圓の香果が梢間に垂下する姿、座右に一

盆を置けば靜寂の氣自ら座に充ちる。

其實は口にすれば甘香な仙味がいつまでも舌端に殘つて、到底凡俗八百屋店頭の俗味の及びもつかぬ奥ゆかしさがある。

棗の種類は廣群芳譜に從へば三十四種有りと云ふ。これは支那の事である、日本には恐らく二三種有るのみであらう。南方支那には桃實大の大果をつけるものがあるこれは砂糖漬の菓子に製せられる。盆栽としては斯くの如き大果は却つて調和を欠く、普通種がよいが、北滿洲に產する盆栽界で姬棗と稱する一種は葉、實共に最少で珍中の珍である。これは彼の日露戰爭の二百三高地あたりには自生してゐると云ふ。彼の「庭に一本棗の樹、彈丸跡も……」の歌を思ひ出す。

棗は夏日から冬にかけて實を觀賞するものである、太幹よりは細幹に趣が多い、花が咲けば必ず實を結ぶが、余り多く實を結ばせると其枝は枯れる性質を持つてゐるから一枝に多く結果させなくも充分見られるものだから此點を注意すべきである。

春が來ても　芽萌えは其名の夏芽と云ふ如く、實に晩いものである。春芽が出ないからとて心配は無用である。

植かへは年一回四月下旬頃行ふ。眞土を多くし砂は少量が良い、肥料としては油粕と、時々骨粉などを與へると實付が良い。實は其年に出た羽狀複葉の軸に結ぶものだから芽摘みをしてはならない。

害虫は一種果實の心に食い入る虫がある、穿口が極めて小さいからボロ〳〵と落ちる迄は氣付かずに居るが、此虫は如何なる成虫が來て產卵するか不明であるから驅除の法を知るに由ない、最完成に豫防するには、桃や梨の如く袋かけをするより外に策を知らない、七八月棗果の略形を成した時に卵產するらしいから其頃一時袋掛けをするがよいであらう。

落　葉　松（からまつ）

落葉松はまだ培養困難な樹種の部に扱はれてゐる、其昔蝦夷松が枯れる木であつた事を思へばまだ研究する人の無いためであらう。

落葉松は現在三種に細別出來る、富士山の不二松、淺間、山麓の「からまつ」それから

千島の色古丹とニトロフ及レブン島、樺太の一部等に產する「色古丹松」である、富士は四面五六合目に自生し淺間も中腹に自生する、富士のは葉房がやゝ大きくて見惡いが樹皮は粗荒で老樹の趣を存する、淺間の產は葉房は小さく梢も細く其點は良いが幹に古色が乏しい。色古丹松は富士產の長所と短點とを兩方共更に著しくしたもので、其毬果も大形で雌花は强い紫紅色を帶びてゐる點が異つてゐる。

培養法も次第に硏究されてはゐるがまた完全とは云はれない。土用前つとめて日光に當てる說と、四時其自生地の如く半陰の場所に日光を避ける說とがある、北海道及信州などでは最も培養の易い樹とされてゐるが要するに高山樹として溫地の培養に適せないと云ふ迄の事であるから此所置さへ出來ればよい筈である。植土の內の有機質が腐敗醱酵するのを一番嫌ふ如うである、溫地では無機質の土(砂)に植へる事が第一要件であるやうである。人でもそうだ余り氣六づかしい者には觸らずに置く、誰かこの培養を眞實に硏究する好事家は無いであらうか。

合歡木（ねむのき）

其葉が夜は閉ちて互に合する所から其名がある、又「夜合花」「合昏」などの文字も用ひられる。葉が閉ちて眠る如く見ゆるので「ねむの木」「ねむた」などゝ云ふのでもあらう。淡い紅色を暈かした絹の房の樣な纎麗な花が普通の合歡木の花であるが、此外に緋合歡、紫合歡。黃合歡がある。緋合歡は鮮かな緋色を呈し花も大形で最も麗しい。

紫合歡は姫性と云ひたい程矮性で葉も花も小さい。黃色は花は小さいが木は前者よりやゝ大きい。この三種は皆暖國の產だから寒がる事夥しい冬期盆土が凍結すれば凍死では無い凍枯する、現今最も數が少くて珍らしいは黃で次は紫である。

紫合歡は葉に指を觸れゝば見る間に葉を閉ぢ合すこと彼の眠草と同じに感應の烈しい性質がある。

此外に一歲合歡といふ普通の合歡木の變種がある、これは其實生して二年目、卽

ち滿一年或は其翌年には必ず花を着けるこれも珍種の部である。

總て合歡の花が絹の房に見えるのは花の雄蕊で、一房には多くの小花が集合してゐるのである。荳科に屬する植物であるから實は扁平な莢形をしてゐる、盆栽で結實すれば至極面白いが却々困難である。

每年春季に植えかへを行ひ其際枝を切り込み整形するのである、花は新梢の先端に着くのであるから春季の萠芽前の切り込むべき枝は剪り込まなくてはならぬ、そして特別に徒長して見苦しいものは格別であるが新枝は自由に伸ばして花つきを多くするのである。紫、黃、及緋の各種は矮性で伸びないから春季切り込みを控へなくてはならぬ。

日光は充分慾しい。肥料も成長期には充分與へなくてはならぬ。

云ひ殘したが支那では此花を蠲忿と云ふむづかしい文字を用ひ、人をして忿を消せしむと秘傳花鏡にしてある。よく怒る人は此花の一盆を坐右に置かれたいが、この合歡を本書に揭げたのは書中讀者つ忿に觸れる文字が無いとも限らぬ、卽ち蠲忿の効果にて讀者の忿を消す以所である。

辛夷と木蘭

早春の花に辛夷と木蘭がある。雑木を好むものは此花の雅味を愛賞せないはなからう。初冬より疎毛を生じた花蕾が筆の如くに立ち姿が已に好い。花は花木中のツムジ曲りである、早春陽光のまだ淡いのに陽に尻を向けて花を開く、辛夷や木蘭の花を見れば直に方角が解るのである、盆栽は時々鉢の位置が移動するために花も又一方に向いて開くと云ふ現象を見ないが野外の立木の花は多く北向に開く花中の變りものである。

辛夷　の花は普通白色六瓣であるが一種姫辛夷と稱するがある、別名を「しでこぶし」とも云ふ、花瓣が十瓣より十六七瓣迄出で色は紅紫色を呈する。然し葉も花も少さいから姫の名があるのであらう。

木蘭　は普通種は八九瓣で紅紫色と白色とであるが、別に更沙もある。盆栽としては辛夷より枝梢が疎らであるがそれが却つて一種の風韻をなしてゐる。

培養は一般雑木の培養でよいが、早春の花の例として春の蕾は前年の土用前後

に既に定まるものらしいから花後葉の出づるに先立つて植かへを行ひ入梅前に充分肥料を與へて花着きをよくせなくてはならない花は葉に先立つて開くものであるから、花の謝した後は直に植かへを行はねば翌年の花に甚しく影響するものである。

用土は眞土と腐葉土を多くし砂を僅に加へる。よく肥培し夏日陽光に充分當てたものは甚しく凍らない限りは冬季も屋外に置いてもよい、花を早く見やうとするには十二月屋外の霜に晒し、それより温室に入れ次第に加溫すれば余程開花を催進出來るものである。

梔子（くちなし）

梔子は佳香ある花と、其實とを觀賞するもの、夏より翌春迄、碁盤の脚の如き實が常綠葉の上に着いてゐるのも面白い。白に微黄を帶びた肉厚の花、强い香等は西洋趣味に近いものである。

一重六瓣大輪と、八重咲小輪とある、八重咲は葉も小形であるから小梔子(こくちなし)と云ふ。これには覆輪のある變葉種もある。

暖國の原産であるから冬季保護するだけで別に培養手當の上に特殊扱を要せない。

滿天星 (はくちやうげ)梔子を更に極めて少さくしたものは(はくちやうげ)である、又六月雪の名もある、香氣ある白い小花から出た形容名であらう。枝も細く盆栽には適してゐる、葉にも種々の變葉があり昔より培養せられてゐる、盆栽にも時々老幹の形の整つた木を見る。

暖國の原産であらうが、夏時葉の焦げる性質があるから盛夏は炎天に晒さぬ方が良いやうである。香は梔子程佳くは無い。

椿 (山茶)

人の騷ぐものに飽きた茶人などが此幽花椿を好愛する。

つばきに椿の字を當てるは誤で「チャンチン」である、本當は山茶、又は海石榴と書くのであるが永い慣例に從つて椿として置く。

椿の品種は實に澤山ある、外國種「カメリヤ」以外に日本在來種は、地錦抄には二百七種、文化年中の椿名寄には二百二十三種が揭げられてゐる、目下では五六十種を蒐めるにさへ容易な事では有るまい。嘆ずべき事である。

然し盆栽としてはこれ等の八重咲、牡丹咲、段咲、紅白絞りなぞよりは、野生のまゝの山椿が最も好ましい。次では佳人の素肌の樣な白くつゝましく咲くわび助の清楚が良い。別に寒椿と云ふ紅花八重小輪の早咲種が多く培養せらるゝがこれは茶梅(さざんくわ)の部に入るべきものであらう。八重咲では乙女椿が喜ばれる。

山椿が艶のある綠葉の間へ鮮紅に黃蕊の花を何の氣取氣も無く咲く風情は、自然のまゝを憧憬する盆栽趣味家の心を捉へるものがある。然るに椿が余り歡迎されぬは何故だらうか、古來椿は陰鬱な花として歌や句に扱はれた、そして祝ひに使はない、そんな迷信的見地から此花を喜ばないのではなからうか、それにしても元祿、文化頃の德川時代人の此花を好愛し何百種を作つた風雅な時代を偲ばれる。培養は六づかしくない、植土は輕鬆な腐葉土、要は山土の如きが良い土の固まらぬ

樣に植へ込むのである時季は花謝した後直に枝を切りつめて植へかへを行ふ。寒咲物は三月下旬、春咲物は四五月になる。植かへの旬日後から肥料を與へ日當をよくする、針金は必ず紙を巻き覆つたものを使用する、樹皮の外皮が薄いから損し易く、針金の跡の着き易いものである。

わび助の椿は寒中から花を咲くものであるから寒風の當らぬ暖所に置き冬の花として樂しむがよい。少しでも寒風が當れば花は開き切らずに凋萎する少し濕氣のある温かい室に置けばつや〳〵と麗しく咲く。

茶梅（さざんか）

初冬向寒に際し花の無い時に此花獨り咲き初むる、花の中の變り物である。どことなく冷々とした感じのあるも、茶の花と共に此花の特徴であらう。種類も昔は十種もあつたのであるが今では卅數種さへ集め難からう、そして其花名さへもどれがとれやら確められぬ狀況である情ない事である。椿の如く花色にも花

形にも種々珍貴なものがある、國風愛護の盆栽趣味家は此花をも愛護し先人の作出したものを失はぬやうにしたいものである。培養は椿と同一でよいが花は冬の中に終るから植かへは翌春早々行ふて其年の花付をよくのるため肥培するのである。害虫に毒のある黃色の毛虫が付く刺さるゝ時は痒痛の烈しいものであるから注意するがよい。

山櫻桃（ゆすら）

山櫻桃は盆樹としてのよい素質を悉く具備してゐる。幹肌がよい、梢頭迄古色を帶びてゐる、そして春季の花が淸楚で且大ならず盆上の花として如何にも調和する、それよりも此木の第一人に喜ばれ點は實の好ましさである、初夏半紅に色つぎ初めた實の美觀は瑪瑙の珠玉の如く、更に大珊瑚珠を枝に懸け連ねた如く深紅色にと變つて行くのだから珍重さるべき筈である。

山櫻桃は本州中部にては高原の氣候に適するものである、東京の夏はゆすらに

は稍暑過ぎるやうである。從つて半陰簀下などに培養するがよい。それでゐて冬季枝枯れを生じ易いものである、この原因は夏日に樹を衰弱させて置く爲である。春季植かへを怠ると冬に枝枯れの多く生じ易いから早春樹液の動き初めた頃植かへを行ふ。植土は腐葉土を五分眞土二と砂三位の土合せにて輕く植へ込む。肥料はなるべく稀薄な水肥にして時々施す。針金かけは春又は土用前に行ふ、秋に至つて枝を手荒く扱へば冬必ず其枝は枯れるものである。

海棠と深山海棠

優しき姿、艶な色、殊に春雨に濡れて色増す風情は嬌媚人を動かすものがある。海棠にはいろ〳〵の種類がある。秘傳花鏡には貼梗海棠西府海棠、垂糸海棠の三種が擧げてある。これは海棠の本家支那の種名であるが、日本にも其儘共通してゐるは垂絲海棠ばかりで、西府と貼梗はどれであるか分明しないが、西府海棠は『其香甚清烈、秋に至つて實る、大さ櫻桃如く微に酸し』としてあるから實海棠(受咲

海棠)とも其香清く烈しと云ふ點が異つてゐる、貼梗に至つては其解説を見ても見當がつかねが垂枝に對する貼梗で花が枝に貼着してゐるものと思はれる。然し恐らく日本には頗る稀な樣である。筆者の少ない見聞では未だこれを知らぬ。盆栽としては垂枝と受咲とが專ら培養せられてゐる。垂枝海棠は、其梗が細長く糸の如く垂下するので此名が起つたのであらう。醉妃海棠の名は揚貴妃の故事に由來すると云ふ。

受咲海棠と東京で云ふのは、名古屋で立花海棠と云ふ、支那で垂枝に對して貼梗が有る如く、花が垂れず上向いて咲くのを立花と云ふたのはよく率直に其狀を說明してゐる。受咲と云ふのもやはり同意の說明的名稱である。別に臺海棠と云ふのは其れが接木の砧木に用ひられたがために(だいかいだう)と云ふのであるが、平常「臺海棠」の文字を用ひられてゐる然し、其因由する名から云へば砧海棠とすべきであるが。臺も砧も余りに語り過ぎて粹な花海棠には何となく調和を欠く感じが無いでもない。

深山海棠　海棠と云へば世間一般は艷な花と思ふが、盆栽界だけは更に一步進んで、深山海棠の清楚を愛する、つゝましやかに何の色氣も艷氣もなく咲く深山海

棠の侘と清楚とを賞する至高の鑑賞は恐らく吾同好にのみ倶に解する尊さであらう。深山海棠は、別名を(ずみ)とも(ひめかいどう)とも云ひ、大實と小實の二種が有る、大實は熟すると紅色を帶び美しいが枝梢が疎である、小實は熟して黄色を呈するが枝が密茂する、やはり一長一短は免れない。

幹も自ら古色を帶び、花も清楚、實も長き柄をつけて垂下する狀は面白い、盆樹種として實に理想的な條件を具へてゐる、殊に、本州の高原には汎く產し盆栽の數も多いから名木も多く、此種が雜木類中屈指の地位を占めてゐるのは偶然では無い、垂枝其他が園藝的種類なるにこれは天然の種木である、自然の風趣の具へてゐるのは又當然である。

越後からよく出る姫林檎は、林檎の名は負ふてもやはり海棠の一種と見るが至當であらう。實海棠を擴大して見れば林檎であり、林檎を縮圖すれば實海棠であるから只境界線の問題ではあるが、姫林檎は海棠の領分に入れるが至當であらう。

海棠の類は實によく肥料を受けるものである、名古屋方面で夏日は隔日に夕の灌水代りに油粕の腐熟した薄肥を灌ぐのである。かくの如く多肥を受けるものであるだけに根廻りも實に迅速であるから春三月に植かへをする際は枝幹の發

育を計るものは太き根を思ひ切つて剪除する。そして稍々小形の鉢へ植込み置き、初夏に更に一回大形の鉢に土を振はず其儘植へかへするのである。然し深山海棠の如き灌木性のものと、垂枝も受咲も老木はこの法方を行つてもそれ程の効果を得ないからやはり春一度の植へかへで結構である。

多肥を施すものゝ常として植込みに際しては鉢底に充分水抜けよく粒狀土砂を多く入れなくてはならない、そして上部は細粒狀の肥土六分、砂四を用ひる。關西では肥土三分、砂七分と云ふ植土であるが、これは養作專門の人のやる土合せである。一般には砂三、或は四、土六或は七割が安全であらう。

深山海棠は勿論土の多い方がよい樣である。

灌水は普通の花木雜木と同じであるが、過乾過濕を注意せなければならない。

海棠は開化促進のよく利くものである。普通は四月末の花であるが室の暖所に置たものは三月初にもう花を見られる。

柑橘類

實物として柑橘類は培養自慢の人々が自ら結實せしめて喜ぶものゝ一つである。就中

佛手柑　は結實困難であるが彼の異形な香氣高い果が枝に下つて日毎に肥大し色付いて行く姿は實に面白い。佛手柑は其實の形の良いものと如何に大果をつけても其先端の指の如くに分れないものとがある、これは樹の性質であるから種木は良い物を撰み丹精するがよい。

佛手柑は最も肥料を好むものである、肥料さへ充分に届けば先づ成功すると云へる、只多肥は根腐れを生じ易いから此點を注意すればよい、肥料は一週間に一度位濃厚な油粕の腐熟水を灌ぐが其上に平常の灌水に代へて薄肥を一日數回與へるのである、その爲めに盆土の上は常に肥料氣が絶える事が無い、斯くの如く多く肥料を與へるのだから一度でも土が乾けば必ず根腐れを生ずるから此點を最も注意し少しも油斷が出來ぬのである（關西方面では鉢の傍に肥料の壺を置きガー

ぜの如き水を吸ふ布を以て斷へず盆土の壺中へ肥料を導く法を行ふと云ふがこれもよいであらう）從つて植込みも注意して水拔けをよくし盆底に溜り水を嫌ふのである、淺盆は勿論用ひてはならぬ、先づ鉢底一寸位に天神川砂の荒いものを入れ、上部は赤土粒、砂等を混じた普通の植土を用ひてゐる、寒冷の際は温室なれば結構だが、フレームに入れゝば充分である、要するに大膽に肥料を與へる事に於て必ず着實させ得るのであるが冬季温かく濕氣のある所に置くが肝要である。

佛手柑の次に多く在るは

金柚子（きんづ）である、これは其名の如く柚子を豆粒位の小形にしたもので木も頗る矮性である。冬寒がらせなければ培養は頗る平易なもの實付もよい。實は秋末から黄金色に色づき春迄枝に止まつて愛すべきものである。

菊蜜柑　果實に數條の縱の凹みがあつて菊花の形をしてゐるので菊みかんと云ふ最近好事家の間にもて囃されつゝある、實付もよい培養も困難な者では無い。

此外一歳蜜柑、四季成、きんかん、柚子、三寶、達摩、オレンヂなどあるが樹形は面白いものが少ない。これ等は何れも冬季凍らない暖室に保護を要する、肥料は一般に盆樹よりは多く與へ、日光は強い程よい。

栗

林の情趣を連想するに栗に及ぶものはあるまい、栗の刺毬一つを見たゞけで秋闌なる野を思はれ林の印象を呼び起す。大自然の情趣に憧憬るゝ同好にとつて栗程懷しいものが又とあらうか。

栗は其刺毬が結ばれて初めて栗の情味がある。刺毬の成らない栗は栗としての生命は無いと云はれやう、然し實は結ばなくも六月頃梢頭に咲く飾り紐の如うな花にもやはり野邊の雜木林の連想はある。雜木を好むものに栗を愛さぬものがあらうか。

然し盆養すると結實の難いものである、それだけに成らせて見る樂みも深い。種類にも數種ある、此頃珍種として喜れるものに枝垂栗と云ふがあるがこれは盆栽誌の七卷二號盆栽寫眞誌上展に入賞して以來騷がれ出したもので、實生して二年或は三年目には結實し、枝は枝垂の性質を具へてゐる、芝栗の變種であるから枝も細く盆養に適する。

三度栗と云ふは一年に三度花をつける盆養でも春の花は培養に依て實を結ぶ。又伊豫に七度栗と云ふのがあるそうであるが未だ實見しない。

實の形にもいろ〳〵の變種がある最近のトゲ無し栗は其内の珍である。

培養は春早く植かへを行ふ、根及枝を切るには最鋭利なる刀を以て切口の滑かにする、殊に其根を利れぬ鋏などにて挫じく場合は樹の澁が作用して、そこより腐れ込み生長を妨ぐものである。接木するには其接穗を澁抜きと稱し暫く砂中に埋め置くから考へても此切り込みは注意を要する。又栗には獨特なアブラ虫が盛んにつく物である。此虫が付くと葉裏は黑變し見苦しいから時々殺虫劑を注ぐ事。

植土は眞土、山土等にて輕く植へ砂は鉢底に入れるのみでよい。肥料も欲しがるものであるが、春の初めから時々少量の燐肥を與へると實付がよいのである。

冬期枝枯れの烈しいものである、これを防ぐには彼岸後鉢から拔き土を壞さず其儘南向の暖かい地へ下してやる事が最よい方法である、そして早春これを鉢に取るのである。栗の枝が枯れると云ふて嘆するは未だ保護の法を完全にしないためである。

竹

歳寒高節。四時蒼翠。竹を愛せざるものあらんや。

竹は東洋特殊な植物、竹の風韻はやはり東洋人で無ければ解されない。

竹の種類は澤山ある、支那には二百種以上に及ぶと云ふが日本にはそれ程は無い。盆栽として培養されつゝあるは

寒竹、苦竹(マダケ)、孟宗竹、淡竹(ハチク)、紫竹、雲紋竹、斑竹、鳳尾竹、布袋竹などである

就中一番多く見受くるは其培養の易きため鳳尾竹である、これは一ケ所より叢生し竹と云ふよりは草の感じのするもので趣味は低い。寒竹は其名の如く晩秋初冬に新筍を生じ寒を恐れざる所如何にも勢のよいいさぎよいものである。竹として一番竹らしい竹は淡竹、孟宗、苦竹であらう竿徑一二分、高さ尺程にして枝葉細密に茂つたものは竹林の風韻が窺はれる、これに次いでは雲紋竹、斑竹、紫竹なども竹としての味は備へてゐる。孟宗竹の稍太いものを短矮に仕立て、只一竿盆中に植へ込んだものをよく見るが竹としては珍と云ふばかりで竹の趣味は無い、竹

はやはり叢をなす所に趣がある、淺盆に入つた數竿の痩竹、自ら長短をなしたものに蒼苔滑な石を添へたものなどは、生きた文人畫である。即ち詩である。

培養法は種類が異れば其性質も差異があり其取扱ひも異つてゐるが、大體に於て同じ方法で細かき事は其性狀を知れば應用出來る。こゝには孟宗竹、苦竹などに付て述べる。

先づ竹の植替へは五月十三日が最もよく活著するといはれ、此の日を竹醉日などと呼んでゐるけれども何も此の日に限つた事はない五六月頃なればいつでもよいのである。外の盆栽の植替へはたいてい年一回であるが、竹は二回やると成績がよいと云ふ實驗者もある。この方法は四五月頃第一回の植替へをし、ものに依ては九月に又一度やるのである。九月には撞木根を殘して他の凡ての根を除き去ると云ふ。これは參考に止めて置く。

二度植かへは行はぬ迄も年一回は必ず植かへを行ふがよい。

竹苗の名產地は房州の豐房村である。此の村では盆養に適する小さい苗を作つてゐる。然し一般としては一月頃に鞭根の筍のついてゐる根の多いのを選んで適當な長さに切り、温かい場所に淺く植て置く。即ち此頃から苗作りの第一の

作業にかゝるのである。すると五月中旬頃迄に、徐々に筍が伸びて來るから四五寸になつたら皮をむくのがよい。此の皮をむくのが竹の盆栽の祕訣で、それは皮がとれて幹が空氣にふれると節が伸びない即ち早く皮をむいて高さを一尺位に止めて了ふのである。然し此の剝皮作業は割合にむづかしいので、餘程氣長にやらぬと失敗する。始めは二三日目に一枚位の程度で剝皮する。そして剝ぐ時は一度にむいてしまはず、竹の皮を少しづつ縱に割くのである。これがうまくゆけば丈餘に伸びる竹が一尺位でもう生長しなくなりこゝに盆栽竹が作れるのである。之れを五六本、一つの鉢にうまく植れば雅致のある竹の盆栽が出來上る譯である。翌る年からは此の盆栽の竹の根から筍を伸ばすと親竹が枯れて了ふからである。然し配置の都合や親竹の損んだ場合は必要なものゝみを殘して矢張剝皮作業を施すのだが培養當を得ないと發生する新幹は次第に細少なものとなるを例とする。

年々かうして筍をとり去つてをれば竹の盆栽は四五年は美觀を保つものである。幹に時々香油を塗り、布で拭き上げてやると光澤が出て美しくなりその上害蟲に侵されなくなる。

肥料は充分に施さなければならぬ。肥料が不足すると害蟲に食はれる惧れが生ずるのである。

肥料には油糟が最も適當であらう鰊がその次ぎである。用土は眞土七砂三位がよい。

竹には貝殼蟲がよくつく。此の時は煙草の煮汁を塗つてやると大抵とれて了ふ。

冬期は室內に保存し、盛夏の頃は强光線の直射を避けた方がよい、葉は四五月頃に莖部から剪除すると更に新葉を發生し鮮綠なものを眺め得らるゝ。此葉が九月頃見苦しくなつた場合は充分肥培して置て更に葉刈りをしても差支無い。

灌水は常に充分に與へる必要がある、鉢底は極めて水拔けよく裝置して置かねばならぬ。

鉢は內緣のものは宜しくない。何故ならば、內緣であると根が張つて來ると移植の際に拔き取る事が出來ぬ困難があるからである。

竹の盆栽で盆土が中高に盛れ上つて見苦いものがある、それは根が充分に張つてしまつた事を證するのだから植へ替へをしなくてはならぬ。植へ替へを怠ると各稈の勢力が不均齊となり、枯死するものなどが出來る、新竿を延ばし舊竿を除

く場合は切株を其まゝ殘さず見えないやうにした方がよい。之がためには株を刄物で縱横に切つて置けば容易に腐敗して取り除くことが出來る。
笹の類は至極簡單である、清新な短矮な葉を得るには年一回全部を刈り取る。
やはり根張りのよいもので中高になり勝ちであるから注意を要する以上は大體竹を通じての取扱法である一種一種に就て細述する煩に堪へぬから各自の取扱適當に俟つより外はない。

柿

柿程秋來の氣分を唆るものはない、柿の青葉の間に、何時の間に熟れたのか朱色の柿實を發見した時程、もう秋だなとしみ〲思はせるものはない。秋も次第に闌けて其葉は鮮かな柿紅葉して一葉落ち二葉落ち、枝は次第に疎になつて、朱色の柿實が鮮かに點出する有樣は侘びた晩秋の情景に無くてならぬものである。
盆栽の柿も冴へた其の美果が二つ三つ垂れ下つてゐるのを眺め入ると、田家の

籬落などに點出する情景が偲ばれる。そしてあの粗朴な生活が聯想されるのである。

柿にはいろ〱の種類はあるが、葉の柿紅葉する事も、そして枝も細かくよく茂つて、自然の柿樹の俤のよく出る事からしても山柿が一番よい。盆栽の柿の實のつくものは多くは接木である、柿八年と云ふが盆養の實生樹は八年が十年でも果實はつかない。實の付くのは接木が多い。花後結實した様で梅雨明けの頃よく落ちるものである玉利博士の説に

どう云ふ場合に能く柿が落ちるかと云ふと旱魃が續いてゐる間は落ちぬがそれから雨降りて濕りがあると落る、又これと反對に雨が長く續いてゐたのが照り上つて來ると又落ち始める、それは此の蔕は實の小さい時から割合に大きくて、青く丈夫で革質の如き硬い性質を帶び、よく發育せぬものである、其上に固着せる柿實が急速に發育膨脹すると自身で其蔕を押し離して落るのである。して見ると種の有無に關せず、又花粉の交合如何と云ふことにも關せぬやうである。

と、參考にすべき事である。

柿は植えかへた年には結實せぬ。又柿は一年置きで無ければ實を見られない、と云はれてゐる、然し年々必ず着かせる法がある、それは先づ春季植え替へをする際に舊土の全部を取り除く事をやめ、鉢より拔き其形を壞さずに其儘にし凡三分の一位、その一方のみを根ごとに剪り除きそれをそのまゝ鉢に入れて肥へたる新土を其所に塡めるのである。翌年は又其舊根の存する部分を三分の一剪除する。かくすれば三年目に全く一新する譯である。又柿は、一年結實した枝には翌年必ず實を結ばぬものであるから、先づ豫め今年は此枝、來年はこの枝と大枝を二つに分けて定め置き初めの年に枝一枝の着花を除くのである、かくすれば毎年結果せしめるのである。

鉢は比較的大形の深鉢を用ゆるに如くはない、土は鉢の底に矢張り死水の溜らぬやう、赤土の粒或は荒らき砂を入れ、上部は眞土又は赤土の微細なる微塵を拔きこれに二三分の天神川砂(柿には淺間砂もよし)を混じて植へ込むのである、

肥料は早春發芽する頃に出來得る限り肥培し置き、開花する頃には一月に一度位極めて稀薄な水肥を施すに止めて置く。そして常に微量の過燐酸石灰を灌水中に混して用いて年々結實せしめつゝあるを見た。

柿の剪り込は冬季に行ふのである。

柿の枝は頗る脆く折れ易いものであるから、整枝するために撓め曲げるには細心の注意を要する、先づ麻、打ち藁などを巻き、稍太きものには添へ線をして靜かに曲げなくてはならぬ時節は芽の將に萠えやうとする、四月頃が一番安全である。

豆柿

柿の一種に豆柿といふ極めて小果實の柿がある、別に小柿とも信濃柿とも云ふ。熟して紫黒色となり何時迄も枝から落ちぬこれにも大實と小實がある、葉も小形で枝も柿よりは密生する性質をもつてゐる、培養は總て柿と同一でよいから玆に省略する。

藤

藤の花の長い房が懸崖卓から垂れた姿は初夏の好觀である、野田藤、山藤が普通種で、どちらにも白と紫とがある、野田藤は攝津の野田の原產で花は少さいが房が長く伸びる。山藤は花房は短いが花は大きい、そして蕾の時に袋の如き大きな苞に被れてゐるから袋藤とも云ふ。此外香氣の良い香藤、紫黑色の黑藤もある。

培養法は、本來濕地を好み甚しく水分を吸ふものであるから深鉢に入れ、溝土を一度乾燥したもので植込む、そして日光に充分直射し、春と夏は水は何回でも與へ盆土が常に多量の水氣を含む樣にする。肥料は水肥を薄めて隔日位に與へる花の着く木は日光によく當てれば蔓は余り出でず花芽となるものだが初秋には花芽と徒芽とは見解がつくから其後に切り込むがよい。

別種に土用藤と云ふのと、盆栽で花を見た事のない盲藤と云ふがある、共に藤程水分を好まない、培養法は普通の雜木と變る事が無い。

醋甲藤は盆栽では珍重されてゐるから項を改めて書くことゝする。

醋甲藤（さくかふふじ）

「なつふじ」とも云ふ「臺灣醋甲と薩摩醋甲の二種がある「臺灣種は花の濃紫花で葉も厚く濃綠色を呈する「薩摩」藤は花は淡紫色で枝葉共に細少で葉色もやゝ黃色を帶び且つ肉薄である。盆栽では薩摩藤を殊に尊ぶが「未だ品の少ない爲と氣品が如何にも上品である爲めであらう。

何れも暖地の原產であるから冬季は室內に入れ保護を要する「冬季屋外に放置すると落葉するが室內に置けば綠葉をそのまゝ保ち續けるものである。花は八月中旬から咲き初める。

培養法は腐葉土を多くして植へ込む「新梢の先に花を出すのであるから春から肥培し「初夏は最も多く肥料と水とを與へる「開花前後は受皿に入れて盆土の吸水を多くするもよいであらう。薩摩醋甲が珍重されるは繁殖の困難なためである、挿木も厭條も利かない只臺灣醋甲や土用藤を砧として嫁接するより外詮方ない、其上成長の遲々たるもので母指程に太らせるには何十年と云ふ霜星を要するものである。

梧桐

「秋風一陣先づ秋來を告げるものは梧桐である。「一葉落天下盡知秋」とか「階前梧葉已秋聲」とか人口に膾炙した句が多い。初秋の象徴は先づ梧桐を掲げねばなるまい、盆栽としたは綠幹に新葉の萌え出した眺めも春の見るものとしてよく、婆娑として天を覆ふ樣を偲ぶは夏の觀賞に適するが、何と云ふても此樹が先づ秋を告げる情趣は初秋の期節物としなければならぬ。

梧桐は其幹の青白色なるため青桐とも呼ばれ又青梧桐とも書く、所によりては「あやぎり」あをによろり」「いつさき」などの異名もある。

五月頃に黄白色五瓣の花を梢頭に攢簇して開く實は莢を覆ふて梢頭に五個或は二三個づゝ着けるこれを槖鄂などゝ云ふ六つかしい文字を用ひられてゐる、此莢が熟すると一隅が綻裂して中に三四個の大豆程の實がある、これが梧桐子と稱へて食用になるもので、支那人は大好物であると云ふ。秘傳花鏡には「皮乾けば則ち皺して而て黄なり、其仁は肥嫩にして香し、生にて啖ふべく、亦炒りて食ひ茶に點

すべし」としてあるから「生でも炒りても食べられるばかりか茶の代用にもなるのである、其味は芡實に似たりとある、が味ふて見れば全く鬼蓮の實の味と變らない。

此樹の盆栽として培養は何等の困難も無い、性過濕を嫌ひ、輕鬆な土質に適しないから、用土は鉢底を水拔けよくし肥土と砂とを六と四位に混ずるが適當のやうで此外は只樹として肥料を與へ灌水し、根が張り過ぎた場合は春季に植へ替へればそれで足りるのであるが從來は皆實生にのみ依て此樹を培つてゐたから盆栽で開花した物を見ないが盆上の梧桐にこれをつけ得たら面白からう。

梧桐の盆栽は昔から盛にあるが桐(きり)の盆栽は未だ實見した事が無い、盆養不可能か、それ共未だ誰も手をつけないのか、兎に角此の大形の葉は盆樹としては少々無理な事かとも思はれる。

落霜紅 (うめもどき)

うめもどきを落霜紅と書く、實によい文字である、これ程樹の感じを現した名稱

は一寸他に見當らない、霜枯れの杜や林に點彩する此の眞紅の實は思はず足を止めさせ、近づいて見る氣にもなり一寸摘んで見たい心さへ湧く、又色彩に乏しい冬の盆栽中でこの眞紅のはなやかさは吾々を何奈程樂しましめて具れることだらう。あの珊瑚の珠に光澤を帶ばせたやうな燦々たる美玉を枝にかけ連ねた美觀は花に增して好ましいものである。

一體秋程、赤の色彩が豊富な時は無いが霜の深くなるに從つて、霜葉悉く落ち盡してしまつた冬には全く赤の色彩は乏しい、その中に獨りこの落霜紅のみが燦然と異彩を放つてゐる。そしてその實は陽春三月頃迄枝に留まつて吾々の目を樂ませて具れるのである。

落霜紅の中に稀に白實を結ぶものがある、恰度象牙で造つた珠のやうで赤色に比して澁い侘の趣がある。これは落霜紅の文字が一寸變になる、落霜白(呵々)とでも云ひたいがそれも亦なほ變だ、白實落霜紅と云ふても何だか矛盾を感ずるこの場合は梅擬或は「梅嫌」を用ひて白實梅擬でいゝ。白實梅擬は赤實種に比して葉が少しく大形で圓味をもつてゐる、そして葉脈が凹んでゐる、樹皮も稍々灰白綠色を呈してゐるから果が無い時でも見分けることが出來る。

又この白實に全く同じ葉形をして圓葉落霜紅一名(あをはだ)と云ふのがある、實は赤色を呈し酷似してゐるが、葉が短かい枝の端に簇生する特性を有してゐる、盆栽としては殆ど見受けない、又未だ實の付いたものを見た事がない。

尙珍らしいものでは風鈴落霜紅と云ふ、まゆみの如うに花梗が聚散花序をした一種がある、實は赤色であるこれが盆栽にあれば珍重するに足りる。

又珠實が薄紅色の一種がある、俗に「うるみ」と云ふて珍らしいものとされてゐる。

落霜紅は枝を矯めることの最も困難なものゝ一つである。針金をかけて靜かに曲げてもピチッと云ふ音がしたかと思へばもう折れてゐる。そのもろさには啞然とする程である。これほど盆栽の技術家を泣かすものは無い、時候外れに異彩を放つだけあつてその枝まで一僻の吝嗇者である。枝の柔かい時は春季樹液の動き初めた頃がよいやうである、この時に丁寧に麻を卷き少しく太目な針金を用ひ一螺毎に靜かに曲げるより外仕方が無い。

植替へは春四月上旬に行ひ、植土は赤土の細粒と砂粒を混へて水拔け良く植込めば先づ安全である。新らしく出た梢に開花結實するものだから、枝の剪り込みは矢張早春に行ひ、よく肥培し、炎暑の候は午前中日光に當てる場所に置くか或は

簀下に置くがよい。夏日葉を焦くと秋になつて鮮かな綠葉の間に早く染め出した朱玉の美觀を味はふことが出來ぬ。また實物の常として水切れのないやうよく注意せなくてはならん。

鉢は白色の鉢を使用するのが一番よく調和する白の鉢なれば綠葉の時の眺めにも赤實をつけた時もよい、朱泥や其他赤色の鉢を用ふると實の紅色の麗はしさが目立たなくなる。

落霜紅を長く鉢に持ち込んだものは皆一樣に根元が見惡い瘤伏を呈するのが常である、實に不自然で美觀を損する事が多いが、これはこの樹の特徴だから仕方が無いと云へばそれ迄だが、どうかしてこの瘤を作らぬ培養の方法は無いものだらうかと常に思ふてゐる。

この樹の種木は多く山地から採るものであるからよい樹姿を備へたものが少ない、幹を矯めて整へる事も困難であるから多くは剪り取つて新芽を伸ばし形を整へるものである。がこんな次第で落霜紅には疵の無くて形のよいものは極めて稀である、あれば市價は甚しく高いのが常である。

實生は稀にはあるが發育の遲いものだから多く小品盆栽として形を整へられ

てしまふ。高さ二三寸の豆盆栽に紅い實が枝に連なつて結んだ樣は實に愛らしいものである。

用土は撰ばぬが眞土と赤土の細粒とを同量に混じたものがよいやうである、肥料は充分に與へ夏日葉が黑味を帶ぶ程に肥培すると秋の果も肥大した光澤のあるものを觀る事が出來る。

石楠

清淨な花――と云へば石楠の花を指摘するであらう。此花はもと雲表の神仙、高山植物中の女王とも云へやう、盆栽に樂しむ程のもの此花を拉し來りて坐臥咫尺の間に天外の花を觀賞せんとするのは又むべなる哉である。

盆栽の天狗連が黑物好を以て通としながら此花のみは例外に置かれてゐる、然し日本にあるものでも此花の研究はまだ〳〵外國人に先んぜられて吾々の矜りを奪はれてゐるのは誠に殘念な事である種類も澤山あるが盆養される日本種を

擧げて見る。

大石斛と云ふのは九州、四國の山中にあるもので別に筑紫石斛と云ひ一輪二寸に及ぶものが群り咲くので本邦石南中の壯觀であるが紀州にも此種があり幹廻り一尺に及ぶものがあるとの事である。

細葉石斛は信遠の國境にのみ產する一種で世界に唯一の珍種である、葉は細長く幹は他種の曲る性に反して直立する性がある。兎に角珍種である。

白石斛花は東北地方の高山に多く生じ、葉は薄く、裏面は淡綠色或は淡褐色であるから花無くも判別する事が出來る、就中葉裏淡綠色のものは花の色純白で淡褐色のものは、開花の時淡紅色を帶び後白色となるを例とする。それ故に白花石斛の中に加へられてゐる。

黃花石斛は極めて矮性の一種で、花は淡黃色葉も小形で車輪狀に出る、これは培養の困難のためいつも吾々を苦しませるが未だ滿足な培養法を聞かぬのは園藝界のために惜しむ事である。

普通石斛の種類と云へば以上で盡きるのである培養法は高山性のものであるだけに持ち込む迄が面倒であるが持ち込んでしまへば何でもない。元來高山の

樹下など半陰の地にあるもの、そして高山の常として常に霧につゝまれ空中水氣ある所に生育してゐるものであるから、これに準じた培養手當をさへ行へばよい鉢は淺盆よりは中深の盆が適し、用土は近時皐月に專ら用ひらるゝ鹿沼土と稱するフカフカとしたよく水氣を含む土に、砂粒を二割程と腐葉土二割位を混じ水拔けよく植へ込む。石楠は植替へを最も嫌ふものであるから完全な植込をすれば五年位は其まゝ放置した方が成績がよい。時期は花後五月から入梅時に行ふ。

肥料はよく腐熟した淡い水肥を度々施さないと花着が惡るいが、然し肥料のために盆土の表がいつも粘るやうでは必ず根腐れを生ずるから淡肥が土に吸收せられる程度にする。尤意を用ゆる事は其置場であるが普通種は午前中日光に當る所に置き盛夏は簀下又は樹下半蔭の場所に置くがよい、然し花を多く付けるには成るべく弱い日光に多く浴せしめなくてはならない。黃花及白花種は性質が赤花種に比して弱いからこれは夏日は朝日のみ當る所に置き、そして何れも葉に噴霧器を以て度々霧を注ぐ事を忘れぬこと。

冬季は溫室へ入れる必要は無いが凍結せない設備を施さなくては折角着けた蕾も開き得ず腐れる事が往々ある。花が散つたならば直に花梗を切り去り、結實

に樹勢を費さしめぬやうにする。

桃葉衛矛（まゆみ）

實を觀賞する盆樹である。秋末枝間に紫紅色の實を懸け連ね、後裂開して黄金色の子實を出す狀は花よりも美しい。種類も大實と小實とある。

別な一種に「つりばなまゆみ」と云ふがある、盆栽の方では「つりまゆみ」とも「つりみかん」とも云ふてゐる、實の柄が長く垂れるからである、實は五錢白銅位の大きさがあり、裂開しない前は蜜柑によく似てゐるので「つりみかん」などと云ひ出したのである。これが五つに裂開して紅色の實をはぢき出した所は花よりも美しく好ましい。葉はまゆみより稍大きく幅も廣い、晩秋霜に逢ふと一葉の內に綠、黄、紅と斑に染め分けて次第に鮮紅色に代つて行く美しさは實が無くても愛觀するに足りる。産地は主に甲信地方であるが東北及北海道にもあるやうである。木は非常に强靱で彈力に富んでゐるから折れる事はないが針金をかけてもはづせば直ぐ

に戻つて却々側が付かない。

まゆみ類の培養は一般の雜木と同じであるが腐葉土を多く混用して植付けは土を堅く壓せず輕く植へる、夏の烈日は葉を焦くから簀下などに置く方がよい。植かへは春季に行ふ。

まゆみの盆栽は古くからあるが、つりばなは大正十年頃初めて、盆栽として現れたものであるが俄にもてはやされ今では相當數も出來名木も見られる樣になつた。枝は臘梅の如く對生するから剪定に注意するがよい。

黃梅

黃梅は高原地方に適する早春の花である、信濃あたりの山中の家の籬などの間から、雪が消えたばかりの早春、ぽつ〳〵と黃花を開くのをよく見受くる、迎春花と云ふ名はよく穿つた名である。東京では少し暖めれば一月にはもう花を見られる。支那でも早春の花として古來文人墨客に愛翫された。

以二十二月及春初一開レ花、故名二迎春花一と汝南圃史に出てゐる。

黄梅は九月下旬頃その葉を見ると、老葉と云ふよりは、もう僅に枝に止まつてゐるに過ぎないと云ふ樣に殆ど生活力は失はれてゐる。殊に老樹は全く葉をふるい落してゐるものさへある。木瓜と同じく、冬期も休眠する事の無い、此花は、寒威を忍いで花を開く準備のために初秋既に休養してゐるかの如く見受けられる。植かへは此期に行ふが最もよいやうである多くの盆栽家は皆九月中に植かへを行ふやうである。

然し春四月初旬花後の植かへも決して惡くは無い、然し其結果は秋季の植かへには及ばないとは經驗家の皆齊しく語るところである。

花後植かへを行つたものは、新梢が不揃ひに出で伸びるものは長く伸びるため、芽止まりを澤山生ずるこれに反して秋植へは花後新芽がよく揃つて萌え出し、黄梅に有り勝ちな、梢頭がゴツ〳〵に太る事が少ないと云ふのだから全く理想的である。

黄梅には太い樹が少ない、そして地にあるものは蔓の如く長く伸びる性質を有

するためなか〳〵太らない、盆樹として幹太く枝岐れよく、無瑕に樹冠迄細り行くと云ふ樹は甚少ないためよい樹があれば價も驚く程高い。

根は長く伸びる性質があるから高い立石に附けて其根を蜒蜿と石に添はせ盆土中に放つたものなどよく見受くる、若木は實に强健なもので如何に肥料を多く與へても肥料もたれをせないものであるが、太幹の老樹になると却々氣六つかしい、炎暑は午後の陽を半陰にし、冬も暖かい所へ置くがよい、然し十二月中旬迄は屋外に置き一度は寒氣に逢はせないと、芽と花が變調となり不齋に咲く。

茶

晩秋から初冬にかけて佗しく淡く咲く茶の花は靜である、寂である閑淸である此花が古來文人や茶人に喜ばれたのは無理からぬ事である、色香を競ふ諸々の花は秋風一陣凋落の悲哀を語る時此花獨り浮世を外に咲くのである、妍艶な花を嫌ふ盆栽趣味者も此花ばかりは好まるゝ、殊にこれでもなし、

あれでもなしと盆栽の數々に遊び盡した人の果ては必ずこの花を好愛するやうである。製茶用としてはいろ〳〵の變種があるといふが盆栽には葉の小さきを喜ばれる花は普通白であるが淡紅色の花を開く「べにばなちや」と云ふ一種があつて珍重する人があるが、茶の花の趣味は矢張白に及ばない。

話は盆栽外の別な事になるが飲用する茶は僧侶が支那に留學して覺えて來たものである。弘法大師がたも茶や茶臼などを支那からたづさへて歸つたと傳へられてゐる。

然し茶の實を携へてきたのは建久二年、鎌倉將軍實朝の代、榮西が宋に留學して歸りに携へて、之を筑前の背振山に植ゑた。そして都の惠明上人に分けて『栂の尾』にも植ゑられた。だから一時は栂の尾が茶の名産地となつてゐた。足利義滿の頃、これを宇治に移し、その後は宇治が天下の名産地となつたのである。

現今茶が日本のみならず世界至る所に需用されるやうになつた理由は一種特有のよい風味と、また或る種の生理的作用をそなへてゐるからである、茶の特異なる成分とはティーンとタンニンでティーンは壯快なるかをりと、にがいあぢとを有する。これを内服すれば神經を刺戟して快感を與へる。茶を飲みなれぬ人は、

茶がねむられぬとこぼす。日本人でも玉露などを多くのむと、むやみに昂奮するのはこのティーンのせゐである。

支那ではこの刺戟を茶の効用の一として數へてゐるが、こゝに面白い傳說がある。ふざけた話ではあるが達磨が讀經の際しきりに睡氣をもよほし、眠るまいとしてゐたがいつしか眠りおちてしまつた。それで憤りのあまり、ねむるやうな眼はあつて無用とばかり眼球をゑぐり拔いて地べたにすてたら、その眼球から生えたのが茶だとされてゐる。茶の實がめだまに似てゐるせいであらう。

わが國の古い川柳に、

お茶壺の泊り一宿寢そびれる

といふのがある。宇治から將軍樣へ年々獻上した茶のお使ひが、東海道を過ぎる時の仰々しさのため宿場となつた場所の一夜が騷いだのをあてつけた意味である。嘉永年間ペルリが浦賀に來た時、落首がある。

日本を茶にしに來たか蒸汽船(上喜撰)たつた二盃で夜もねむれず

茶に上等の喜撰といふのがあつたのをもぢつたものである。

さきの歐洲大戰でも、昂奮させる必要からティーンを入れた菓子を使つたさう

で、その需要のため靜岡縣あたりは大にふるつたと云ふ事である。ティーンには
この外に利尿の効がある。從つて支那では靈藥と稱されてゐた。然し量が過れ
ば有害であるらしい。川柳にも

茶がすきになれば頭が藥罐なり

とあるが、盆栽にした茶が好きになつたばりでは頭は藥罐にならぬ事は筆者が
茲に受合つて置く、とんだ茶噺になつた。さて

盆栽としては園圃からよい木振りを採掘して持ち込む事もあるが、多くは實生
から丹精したものに優秀なものを見受ける、實生は三年目には花を開くが枝の數
が急には多く出來ないものであるから其排置にはよく注意し、配置も工風する事
が必要である。

園圃から拔いて培養するには、この樹は活着の難いものであるから餘程の注意
を要する、早春か或は梅雨前がよいと經驗者の談である。

植土は砂を少量混じた壤土がよい、水拔けは勿論よくしてほしい。植替は年々
もしくば隔年に行ひ、春から數回油粕の腐汁を施して、日光には充分よく當る、元來
寒氣をいみ年中綠葉を着けてゐるものであるから冬期は室内に入れて保護しな

くては枯損する、稚樹の内は實をつけぬ方が樹のためによい、花後結果するやうだつたら取り除く事が肝要である。

木犀（もくさい）

天清らに澄む秋、路を歩んでゐてふと何處ともなく馨香を聞く事がある。あたりを見廻しても花らしい花は見當らないが木犀の香である。つゝましく葉隱れに咲いて氣高き香を放つ木犀こそ床しいものである。

木犀には黄花と白花とある、黄花を金木犀（金桂）と云ひ、白花を銀木犀（銀桂）と云ふ、此外に赤花があると支那の書にはあるが本邦では筆者の狹い見聞ではまだ知らない。此樹の盆栽は余り多く見受けない。幹の古色を喜ぶ盆栽では此樹の滑かな樹皮にあき足らぬものがあるのであらう。

然しながら其稀なるが故に又佳香あるがために珍種好み、雜木好みには深く愛されるのである。

盆養しては六つかしいものでは無い。眞土を多く用ひ、常綠樹であるから冬期の烈寒は保護してやる必要がある。植かへは年一度は必要で春四月頃に行ふ。

地錦（つた）

夏日綠翠滴らんばかりの光澤ある葉の風に搖らぐ凉味、秋日燃ゆるが如き紅葉の美觀。地錦の鑑賞的價値はそこに存する。

別名は數々ある。萬葉集には「都多」と出てゐる。其他古名は「つたかづら」「まつなくさ」「いはつな」など歌に出で「なつづた」「にしきづた」などゝも云ふ。

つたが他物へ附着するのは卷鬚の先端にある吸盤のためである。此樹の若きものは其葉に裂目があり、葉面がザラ〳〵として光澤が無い。樹が古くなるに從つて裂目が淺く圓き心臟形となり葉肉も厚く葉面が滑となり光澤を生じて來る。「照葉の紅葉つた」と云ふのはこれである。

初夏葉腋に淡黃色總狀の花が附くが賞する程でも無いが秋末葡萄のやうな醬

果となつたのは愛らしいものである。

一年一回は植かへを要する、春萠芽前に舊土をよく振るい落し、眞土七、砂三位の土合せで植込む、肥料は水肥として一周一度位は施す、痩せると葉の光澤を失ふものであるから。水は常に充分に與へる、葉の比較的多いものであるから鉢土はよく乾くものであるから油斷は出來ない、一度水切をすれば枝の先端から葉が凋みて其年一年は美葉を見る事が出來なくなる。盛夏中は簀下に置き葉焦げを防ぎ强風雨の時など葉の損せぬ樣注意が肝要である。

地錦の類に野葛(つたうるし)がある葉が三個の小葉からなつてゐる、盆栽としては地錦には及ばない。

薔薇(ばら)

ばらと一言に云へば、英國あたりで作出された花ばらを思ふ。然し盆栽としては單純清楚な野生的情趣のあるものと、氣韻とを賞せられる、其點に於て野薇薔、木

香ばらなど多く培養せられる。

薔薇の種類を一々擧げたなら數百種あるがそれを七つの性質、木性、叢性、蔓性、山械性、野薔薇性、玫瑰性、木香性に分けることが出來る。

野薔薇にも細別すると數種あるが盆栽では小葉と照葉とが喜ばれる、別に朝鮮に大輪の一種がある花付もよく却々優品である、又近時四季咲の種類も作出されて野生種以外のものも出來て來た。

木香性ばらには黄木香、白木香、大輪木香などの種類があるが何れも重瓣で輪は小輪は花徑五六分、大輪種は倍位の大きさであるが、盆栽として專ら珍重さるゝ黄木香は香氣が少なく白木香は强い香を放つのである、盆栽界で黄木香を喜ぶものは黄色を貴んだ昔の支那の風習が傳はつて知らず〳〵これを貴重品としたのであらうと思はれるが盆栽として面白味は白木香も決して黄花に劣るもので無い。

殊に香氣の强い點と淸楚な色は盆栽趣味から云へば却て白に面白味があると思はれる。蔓性のばらでは「はとゐばら」がある。これは單瓣大輪の白花で香氣も好くなか〳〵名木も多い。

花薔薇では昔から白黄ばらの氣品あるが盆栽家には喜ばれてゐる。又玫瑰は

まなす)も山草好みの人々に鍾愛されてゐる。

培養　ばらの培養は無造作のやうに思ふが決して左うでない。尤も何百種もある種類の內では割合に容易なものもあるが、大體は困難な物の中に入れてよからう。次には大體共通してゐる其培養法を述べる、種類についての難易は一々述べる事はむつかしい。

ばらは年々一度植かへを行はないと枝枯れを生じ、根に瘤を生ずるものである、時期は春將に芽の動き出した時が好季である。根が活動する迄は風の當らぬ暖かい所に置き、土及其室の空氣の乾燥せぬやうに注意する事を要す。冬期も其保護に依て葉の落ちない種類は尙過乾を嫌ふから日中溫暖の時に葉水を與ふるは効がある。

用土は所に依り相違してゐる、名古屋方面では專ら砂を多用するが東京では氣候のためか土を主とし砂を加用する程度が成績が良好である、土は赤土よりは眞土の細粒を用ひこれを六分、砂の粉末を除きたるものを四分混して植込み鉢底は力めて荒目の土砂を入れ水拔けをよくする事が他の樹よりは必要である、この眞土には肥料分を豫め含ませたものを普通の樹木には用ひる、がばらには全く無肥

料の晒らした土を用ゆるが安全である。そして芽が稍延び根の活動の盛んになつた頃を見て極めてよく枯れた水肥の稀薄なものを時を隔てゝ施す、過肥は却て害多しと云ふて少なければ木に力が出來ない、要するに過ぎぬやう適當にと云ふより外詮方がない。

芽摘みは春季に行ふは花着きを惡くするから止むを得ない徒長芽より外摘除を止め、花後に行ふか或は秋季(十月)中に矯枝剪定を行ふべきである。

冬期はなるべく温かな室内に入れ、根部の凍結を防ぎ、其室の乾燥に過ぎないやうにする。夏季に於て弱りかゝつた木を冬期に油斷すると澤山の枝枯れを生じ又甚だしいは全く枯死することがある。

ばらの中で最も氣むづかしいは白王ばら、又は木香だが、其内でも黃木香は殊に注意がいる。かく云へばばらは甚培養の厄介な樣に思はれるが僅かの注意さへ怠らなければ何でもない事でそれだけに又培養して樂しみも多い譯である。殊に典麗氣品ある花を撰み難物を美事に作る事とは所謂通の所以であらう。

檉柳（ぎよりう）

檉柳は柳の名を冐してはゐるが楊柳科では無い、然し何となく柳に似た感じがある。支那の原產であるが痲疹に効能があると云ふから漢方醫が輸入したものと思はれる。温暖の氣候に適し、濕地を好むものであるから其性質を心得て培養すればよい。植土は砂と眞土とを半々に混用する。

檉柳の幹は扁平になつた物をよく見受くる、それは枝のある側にのみ樹液流動く性質の甚しいものである爲であるから枝配りは良く注意せないと永年の間に畸形となる事がある。

又聖柳程夏時に手のかゝるものは無い、新梢が上へ向つて盛んに伸び出す、眺めよくするにはそれを一々下へ向けなくてはならない。閑人でなくては檉柳は持てないものと云はれる。

夏の觀賞樹であるから石付にした物が多い、これは水切れせない樣に注意を要する。

盛夏烈日の日は半陰に置き冬は屋内に入れて保護せなければ枝枯を生づる。

肥料は春より土用中多く與へ、秋は減ずる。此樹は適當に培養すれば春秋二回開花する性質を有つてゐる、然し其年の新梢には開花せないから花を咲かせるには枝を全部切り込まぬがよい。

挿木は極めて容易に發根するものである。

金縷梅の一族

「まんさく」は早春葉に先つて黄金の采配の如き花を開く、花らしくない花である、此一族で蠟辨花(とさみづき)と「ひうがみづき」がある、これは蠟梅を小さくした樣な花を七八個穗狀に連ねてまだ葉の無い枝から垂下するので愛らしい眺である。

夏時も寒樹も觀賞には適せない只早春珍花を見るだけであるが雜樹好みは期節の花として梅や木瓜に比して變り物なので自慢で培養する樣な事になつてゐる。

楓と云へば「かへで」と思ふが六づかしく植物學の分類で行くと楓は盆栽界で云ふ「えがふう」で槭樹科では無く卽ちこの金縷梅科に屬するものであるそうである。

公孫樹（いてう）

公孫樹は盆栽にして面白いもので昔から愛培されてゐる。

公孫樹は原産は支那だが、今では本家には余り無くて日本の樹となつてしまつた。又の漢名を鴨脚樹といふ。其葉の形から來た文字であらう「いてう」と云ふのは鴨脚を宋音ではイイチヤオであるそれが轉訛して（いてう）となつたのだと云ふ。

公孫樹の盆栽は其葉の綠と黃葉の美趣を樂しむのだが、彼の天を摩す魁偉な姿の縮寫で無ければならない。杉が直幹である如く此樹も直立した巨大な感じのある幹を望ましい、そして樹冠が婆娑として天空を覆ふ姿を現出したい。

この老樹は必ず乳の如き形狀の瘤を垂下する、盆樹にもたま〳〵此乳の垂下したものを見るが老大樹の特徵が出て珍とすべきである。

昔は實生寄植の銀杏林の盆栽があつた一種愛すべき趣があるものだつたが近時見受けない、實生から盆養した公孫樹は結實する事は到底望めない。其葉に裂目が無くなり一枚葉にならぬと結實しない、又此木は雌雄別株である。

此頃實付公孫樹と云ふよく實のつく一種が現れた、これは甲州の某寺に原木があり其枝を取つたものが次から〳〵と根接きをして殖へたのである、これは普通の培養で結實する。

この實付公孫樹以外にも稀には結實する盆樹がある。

培養は春季一回植かへを行ふ。よく肥培すれば隔年でも差支ない。水分を極めて多く吸ふものであるから水切れせない樣につとめる、殊に實をつけやうとするものは水を多く與へる、七八月の頃は受皿に水を盛つて其中に鉢底を浸してもよい。

公孫樹の芽は梢の先に前年から準備されるものであるから切り込みは注意を要する。最生育の旺な春に切り込めばよいが土用以後なぞに剪枝するとそこから腐り込む事がある。

冬は寒がる物でも無いが凍結せない程度に保護するが安全である。肥料は潤

澤に與へてやる方がよい。

欅

明治時代は欅の盆栽は隨分多かつた樣であるが、大正昭和に到つて欅は盆樹の內から影を潛めた感がある。遇あつても名木の數は少い。芽が、淡紫色或は淡紅色に萠え出すも美しく、寒樹にも他樹の模倣の出來ない豊な趣がある、それが斯界から忘れられると云ふのは解し難い所である。

今殘つて居るものは庭木の如く枝を棚に作つたものが多い。欅は幹から枝、枝から細い梢と次第に分岐してそれが一齊に天に向つてそゝり立つ樣な姿がこの樹の本體であらう。然るに盆欅が技巧的に庭木化されたために自然を尊ぶ傾向の著しくなつた現今の栽界から忘れられたのではあるまいか。

これは欅盆栽の本質的に盆樹として容れられない譯では無い、近く欅の盆栽の盛に愛培せらるゝ時が來るであらう。

欅には普通の欅卽ち槻、それから楡欅(北海道でタモと云ふ)楡の一種に「ユウゼン」と稱する細枝に錦木の如き矢羽を生づるものがある。楡欅は葉が小く丸味あり、欅は葉稍大きく先端が尖つてゐる。欅は紅葉するが楡はそれがない。

培養は春一度植かへる事、芽が絶へず伸びるから怠らず摘む事、梅雨明け頃全部の葉刈を行へば細梢が密茂するものである。

培養は砂三分、赤土三分、眞土四分位がよい、盃は樹振りにもよるが淺盃を撰み周圍の廣濶な感じを出すのが欅の持味をよく出させるものである。懸崖や斜幹や、株立なそば石付によるもよい。

兎に角枯木疎木蕭條たる冬の感じは欅の寒樹に及ぶものがあらうか。

かまつか(うしころし)

かまつかには良い木を見受ける。それは幹の皮にも色にも雜木としてのよい味を持ち、枝は細く茂る性質がある。晩春枝頭に叢り咲くばらに似た白花も美し

く、秋になれば鮮紅の小さい實をつけそれが永く保つのである。四季を通じて樂しめる事に於て盆樹中の優れたるものである。

木は相當にねばり氣のあるもので針金をかけて曲げても安全であるから自由に矯姿も出來る。切り込んでもどこからでも芽を吹き出す。花木であり、實の觀賞樹であり、又寒樹も樂しめる、花後青い實の梢頭に露れて肥り行く夏の姿も面白い。培養は普通の畑土で充分である、然し鉢底には水抜けの砂を敷く事は勿論必要である。肥料は普通に與へて置けばよい。

山毛欅（ぶな）

灰色の幹に筋目深い枯葉を蓄へた山毛欅の姿は「山」を直感させる樹である。春の芽出しに粗毛ある白綠の葉を操り出す容にも深山の感じがある。深山の林層を思はせる木だから單樹よりは寄植が趣多い、他の樹と合せても感じを出す役を勤める。

持ち込めば強い木である、石付なぞにしたものはそのまゝ水盤の中へ放つて置ても成績がよい、植かへも年々行ふ必要が無い、夏は強い日光は避けねば秋葉が早くより枯れるものである。大概の雑木は葉刈しても新葉を出すが山毛欅は葉刈は禁物である、前年準備してゐる芽の内に翌年の葉數が定まつてゐてそれ以上増しも減りもせないのだから葉刈をすればもう其年は再び葉を出す事が不可能になる譯である。枝を増させやうとするには新芽の固定した時その下部二三を殘して摘み取れば其各葉腋に翌年の芽をかけ又勢のよい物は胴吹芽も生ずる。肥料も控へ目に施す、植土は撰ばない。枝を針金をかけて螺形に下げた物なぞを時々見るが山毛欅の感じを失はれ變態なものとなつて了ふ。毛山欅は自然のまゝの山趣を強調したい。

一位木（あららぎ）

飛驒、信濃高原、北海道朝鮮方面にある常綠の樹である、昔は飛驒の位山にありて

笏を作つたので位山の一位は著名になつてゐる。雄木と雌木とあり、雌木には紅い肉質の實をつけるが東京ではまだ實の着いた例を見ない。北海道方面でも實をつけやうとするには枝を切り込まずに置く、形よく剪定すれば花の着く部分を切つて了ふのである。實をつけやうとしなければ培養は至つて容易なものである、盛夏烈日を避けてやればよい植土は砂を四分位に多く入れたのが成績の良いのを見た。寒さも恐れない。害虫には殆と侵される事が無い。植かへも隔年位でもよい、只暖地では夏日の注意さへ怠らなければ良いのである。

木通（あけび）

通草とも書く怪的な醬果がぶら〳〵垂下するは趣味の深いものである。

山地で見ると蔓は長く他樹に攀ぢて數丈の高さに達してゐるものさへある。長く伸びる蔓物を盆中へ短矮にして實を結ばせるのだから却々六づかしい。木通は花はよく咲くが結實するのは甚稀である。花は四月下旬頃咲くが雌花と雄

花とあり雌花は雄花に比して甚しく大形である。人工媒助を行ふ事は結實を易からしめる、そして花時は鉢を動さぬ事、水を多く與へる事が肝要である。植土は腐葉土に土を混じたものがよい、實は十月下旬には裂開して落ちて了ふから其後直に植かへを行ふ、早春も不可では無いが秋に植かへを行ふた方が結實の歩が多いやうである。肥料と灌水は相當に多く與へる。

普通は五ッの小葉が掌狀に付いてゐるが、三葉の一種がある、觀賞上からは五ッ葉の方がよい。

別種に「ときはあけび」がある、これは通常むべ(郁子)と云はれる、滑かに光澤のある葉が年中落ちず常綠である醬果も「あけび」の如く熟くして裂開する事が無い、盆養して結實も易く、多く培養せられてゐる。冬季は檐下或は室內に入れ甚しい凍結を防いでやる必要がある。植かへは早春に行ふ方が安全である。其他はあけびと同一の取扱ひでよい。

杉

杉は今盆栽界の人氣物の觀を呈してゐる。矗々として穹蒼に聳立する杉の老大樹の姿を盆上に寫し座右に樂しみ得たなら如何。

杉の有つ景觀は壯大である。其蒼古な太古の神秘を語る老杉の趣を盆上に收める事は却々難事である、杉の名木は尠く、又名木の尊ばれる以所である。

杉は日本の木である、邦土至る所の山河や神域を飾つて森嚴ならしめて。杉でなければ出來ない役を勤めてゐる。

それだけ杉の盆栽は難物であるからこれを試るものが無かつた、然るに明治三十何年頃か「社頭の杉」の御勅題が出て杉の盆栽が頗る高價となり又杉の面白さも一般の認める所となつて、爾來杉は盛に愛賞培養せらるゝ樣になつた。

杉にも種類は澤山ある、庭木用として作られた園藝品種も澤山ある、然し盆栽として老杉の趣を出すのはやはり野杉と云ふ普通の山杉でなくてはならない。

杉の本態は直幹である。寄植にしては森の趣、孤樹は曠野の一本杉の風趣となる。一樣に直幹でありながら千差萬別各々異つた情景を點出するのが杉の特

徵である。

培養は困難では無い、本來陰地多濕の地を好む性質が有るから、鉢は土の多く入る鉢が適する、陰樹では有るが盆養する場合は充分日光に當て、水を多く與へるのである。葉水を好むから朝夕は頭から注ぎかけるがよい。杉は他の常綠樹と異り年中新芽をかけて伸びるから伸びれば摘み、伸ばしては摘みすれば忽ちに葉は密生するものである。然し盛夏僅の間は簀下或は午後半陰となる所に置くが安全である。

冬季屋外に置くと枯れた如く褐色の葉となるものであるが春次第に蒼翠の色に復する、此葉色の變る眺めも杉を觀賞する樂しみの一つである、冬は盆土のヒドく凍らぬ程度に保護するを要する。

用土は山土を多く砂を僅に入れる。濕地を好むとは云へ、鉢の中が常に水が溜つてゐる樣では不可である、水拔けよく植へて度々水を與へる、つまりよく水を含み余水をよく排出する植へ方にするのである、山土(或は有機質の有る土)の乾燥したものを細い篩にかけて粉土を除いたものを用ゆる、植込みに土を松の如く堅く壓してはならない。

肥料は水肥をよく好むから冬季以外は年中よく腐熟した淡い水肥を與へる。

培養中特に注意すべきは、煤煙を避ける事である大都會の樹木は次第に枯損するが其第一に枯れるのは杉で次に赤松である、杉の煤煙を嫌ふ事は樹木中第一である、都會に於て盆養する杉は時々頭より水を掛けて煤煙や塵埃を洗はなくては完全に育てる事は出來ぬ。これは杉を持つ第一秘訣である、夕朝葉水をかけて成績の良いのは單に葉が濕潤を喜ぶばかりでは無いのである。

害虫には初夏に此葉を侵す粉虫がある、これはダニの一種で肉眼では見えぬ程微細なものである時々殺虫劑を以て未前に防ぐが安全であるが葉水をかけて葉の濕つてゐる所へ硫黄華を掛けるも便法である。此虫は蝦夷松、松類などの杉柏類にもつくが極て濕氣を厭ふ性質があるから葉水を多く與へる事は此虫害を防ぐ事にもなるのである、

又針金を嫌ふものであるから、掛ける場合は紙を巻き用ゆるがよい。

樹の高過ぎるものは壓條が可能である、杉の樹幹を常に濕らして置くとそこから發根する事を屢々見る、「とりき」の可能はこれを見ても分明する。

臘梅

花色が黄蠟に似たる故なりとの說があるが、恐らく花少き臘月の花で梅に似てゐる故に其名を負ふと云ふ說が誤り無からう。

嚴冬の花に多く見る如く此花もやはり下向して咲く。蕚は澤山重なり合ひ一番外のものより內側に至るに從ひ豐大となり黑色より次第に透明の黃蠟色となる。其狀花瓣か蕚か其區別がつかぬのが此花の特色である。

兎に角寂寥な感の花である、其枝梢も散慢にして灰色を帶び少しの曲線もなく對生する枝は美の要素を缺いでゐるがそれが却つて一種の澁味を有ち殊に其清香は四邊に高逸な氣をたゞよはす。

種類　には普通種と、素心臘梅、唐臘梅の三種がある。素心臘梅が花も大きく黄色も鮮かで香氣も强い。唐臘梅と云ふは葉が短かく厚く、花も大きく、花心が紫壇の如き紫色を帶ぶから壇香梅とも云ひ又花が開き切らないから磬口梅とも云ふと或書に有るが著者はまだ其區別を判然と見解けた事が無いが參考に記して置く。

培養法は眞土に腐葉土を混じて輕く植へ込む、一年一回花後に植へかへを行ふ秋季十月下旬に行ふも不可では無いが花後がよい樣である、夏の土用前充分に肥培して芽を伸さなくてはならない、そして枝のモロい事に於てこれより甚しいものはないから新芽が綠色を帶びてゐる間から一時に曲げず次第にくせをつける事が第一である、曲げ過ぎてビシッと音がすればもう枝は離れてゐる全く吾儘物である。

南天

南燭とも書く、支那の植物と云ふよりは日本の物と云ひたい、德川の種樹全盛時代に園藝的に作出された種類の多きは日本南天の誇である。其數一々列擧するの煩に堪へない程である。實は普通白實と赤實とであるが稀に半紅のものがある。又其葉形の變化には驚くべきものがある。

盆栽として最珍貴とせらるゝは琴糸南天(錦糸とも書く)である、琴糸にも琴糸青葉と琴糸赤襷と棒琴糸と稱する葉脈のみのものもある。

此外栗本南天があり、これにも白實と赤實の二種がある。
觀賞上から云へば白實は珍であるが珊瑚の如き赤實の色は冬期窓外の白雪に對して好感である。南天は昔より正月の床に挿される、殊に武人は戰陣に向はんとする時勝栗とこの南天を飾るを例としたと云ふ。正月の床間に一盆の南天は故實から云ふても目出度いものである。

培養は深目の鉢を撰み、鉢底に豆程の荒砂を七八分堅く敷き其上に砂を敷き置き、眞土の粉拔きしたものを以て植へ込む、庭園にても南面の檐下などへ植へるに際しては地を堀り砂利を敷き其上に南天を植栽するとよく成長すると云ふこれを思ふても鉢底に些少たり共水の溜るを嫌ふ事が明かである。冬は南向の檐下などにとり込む事を忘れてはならない。夏も烈日に直射するよりは七分陽位が葉を麗はしく保てる如うである、肥料は一年三四回施せば充分である。

におちついた綠の葉の間に初冬から弱光を受けて寂しく咲く花の感じは枇杷の持ち味だが、鈴成りの黃金色の圓らな實の付いたのを金屛風の前に於けば全く畫である、幹山か光琳の蒔畫の感じだ。

枇杷は花はよく咲くが實は結び難いものである。溫地では容易であるが寒地程六つかしい。東京では初冬なるべく早く花を開かせる、そして嚴冬前に實が定まる樣にせないと花は咲いてもぼろ〳〵と落ちてしまう。十月頃から南向の暖所に置き風雨を避ける。植土は砂を僅に混した眞土を普通用ひられてゐる、肥料は油粕などの外に骨粉或は過燐酸肥料を時々與へると花付實付がよい。

枇杷は側芽の出ないものであるから、切込み葉を殘させないと其枝を枯してしまう。枇杷の缺點は腕伸びのする事である。それは懷芽の出ない爲である。又針金をかけて急角度に曲げる事の出來ないものであるから多くは紐を以て釣り撓めて形を作られてゐる。冬季は必ず南面した檐下などに取込まねばならない。

枸杞（くこ）

初冬から早春にかけて紅い實が枝に連りかゝる枸杞の美觀は捨てたものでないが何故か騒がれないのは不思議の一つである。 枸杞は茄子科の植物で若芽は浸しにして食用となる。

培養の秘訣は土用中に必ず植かへを行ひ春出た芽を剪り除きそれより新芽を出さしむるのである、春から伸びた芽には花付きが疎で實も又少い。 成長の烈しいものであるから春の芽を其儘にして置けば箒の如く徒長して見苦しい、土用中に其全梢を切れば秋迄には適當に伸び、其枝は葉腋毎に花を開き實を結ぶものである、それが一度霜に逢へば忽ち紅色に變り美觀を呈する、植土は眞土ばかりでよい、惡性と云ひたい程强いものであるが普通の手當だけはしてやりたい。

幹は天然に古色を具へるものであるから心して整形すれば立派な木を作る事の容易なものである。

蘭

日本の紀元は何年になるかを知らんでも、西暦何年とわざ〳〵永々しく封筒に認める程のハイカラ流行の今日、蘭と云へばすぐに温室培養の洋蘭のことかと思ふだらう、固より花の艶麗なる點に於てはあらゆる花の中で洋蘭に及ぶものは尠からう。花の美さから云へば日本種蘭は一顧の價なしと云ふだらうが、美を超越した幽しさとか氣韻とかを尊ぶ東洋的趣味から云へば、又洋蘭は單に美はしきのみと云はなければならぬ。硝子窓の强き陽の射し込む室には洋蘭の絢爛でなくては調和せず、北窓幽靜に茗を煎る趣味には馨香の幽かに、氣高き風韻ある東洋種でなくてはならん。

古來傳へらるゝ蘭、蕙の文字は春季に花開く種類卽ち春咲の蘭に蘭の字を用ひ、秋季花咲く秋蘭に蕙とする說と一莖一花を蘭一莖多花を梅とする說とある。

これ等蘭には種類が澤山ある、詳細に揭げる事は不可能であるから、現今多く培養せられつゝあるものを擧げて見る。

春蘭、別に「ホクロ」「草蘭」「ヂ丶バ丶」などと云ふ、これは通常有ふれたもので誰も知る事であるが、支那種の俗に「一莖一花」と云はれてゐるものは特に香氣が高く一輪よく室内に馨香を漂はしめる。日本種は培養は容易であるが支那種は稍困難であるが持ち込んでしまへば變りはない。この花の氣高い香か麗かな春の陽を受けた室に滿ちて廊下まで漂よい出づるをふと感じる事などは愛蘭家の捨て難い感興だらう。

一莖九花は葉は一花に似て長く延びる花莖は長く抽いて其多くは名に負ふ九個の花を着ける花香もよい、培養は一莖一花より稍困難ではないかと思はれる。

建蘭「スルガラン」である、雄蘭とも云ふ。葉の長さ二三尺、立つ性質をもつてゐる。夏の末に新らしい篠を出し、初秋花軸は一尺餘伸びて五個から九個位の花をつける。色は淡黃色で僅に綠色の暈と紫色の斑點とがある。香が最も強く一花咲けば滿堂香り、淸韻高雅なものである、此れには種々の園藝的變り物があつて貴品として扱はれる。

寒蘭　草蘭とも云ふ、初冬に花を開き寒中に及ぶからこの名がある。産地に依て多少の相違はあるが、建蘭に似てそれを小さくしたもの、やゝ垂れ下る性がある

花にも大小があるか概して花瓣か細長く、香氣も建蘭程ではないが初冬の閑寂には應はしい幽しさがある。この花の色の青色を帶びたのを青寒蘭と稱へて高士に喜ばるゝ、花と花軸と紫色なのを紫寒蘭、淡紅色のものを紅寒蘭などゝ云はれてゐる。又大葉寒蘭と云ふのは葉二尺餘に及び花も大きいが瓣が極めて細く共色は多く淡き黃色を帶びてゐる。

寒鳳蘭　單に鳳蘭とも云ふ、葉はスベ〳〵として光澤があり、蠟でも塗つた樣な感じがある、そして長きものは三尺餘に伸び柔かに垂下する、そして篠も密生する性質をもつて頗る大きな株となるものがある。この葉の特徵は葉の中央に一條の太い葉脈のある事である。花の軸は葉に比して短かい、そして曲り垂れるが普通であり、花瓣と軸とに薄紅紫の斑點があるこの蘭が寒に入らんとする頃開くので寒を報ずる寒報蘭であると云ふ說もあるが未だ典據を知らない。これに春咲く春鳳蘭と云ふのがあると云ふ事である。

金稜邊　紫蘭とも云ふ。葉は鳳蘭に似た色澤でそれより短かく幅は稍廣い、花は五月頃開き花の軸は長く伸び一莖に十數個をつけ香は少しもない。此種の普通品は愛蘭家に喜ばれないが變種には珍種を出し、明治二十年頃一葉の價一萬圓

と號した干綱、三千五百圓を呼んだ八重衣などを出したそうである。

風蘭　高い梢に引つ懸つて雪白の花をつける、淸澄山などによく自生してゐる小鉢に入れてよく保つ葉變りものもあつて珍重されるのである。

此外に素心蘭、玉鈋蘭、燒及蘭、小蘭、大明蘭、豐歳蘭、漳蘭(雌蘭とも云ふ)などがあるが現在は極めて稀れであるから省く事とする。

培養　蘭の培養はむづかしいもの、特殊な技術を要するものゝやうに思はれてゐるが、特別なものを除く外はそれ程困難なものではない。

本來蘭は淸淨と水氣とを好むが然し水の停滯するのを最も厭むものであるから先づ第一に植へ込みと其用土とに注意すればよい。

用土は東京に於ては赤土を基本として用ひる赤土の硬きもの(ぼか土と云ふ風化したものに非らず)を乾かしてこれを碎き、粉末を除き、これを大中小の三種に分ち置き。そしてこれに混用する、腐葉土も粉土を除き赤土の中と小と同じ粒を二種作る。鉢はなるべく。排水を良好ならしむるために深鉢を撰み底三分の一に最も荒き赤土を入れ壽老鉢の如き深きものには底に木炭を入れ其上に荒赤土を入れる、そして蘭の根を丁寧に水洗ひしてよく乾かし腐つたものを除き紛れ合つ

たものは解きこれを下方に向けよく伸ばして入れ、赤土の中粒へ腐葉土を少し混じたものを鉢の七八分迄入れ鉢に對し蘭との位置を定めた上、上方は細粒の赤土、或は僅かに腐葉土を混へたものを以て滿たし中央僅に盛れ上るやうに植へ込むのである。此方法は要するに灌水が土粒に含まれるばかりで餘分の水は悉く排出されるやうにするためなのである、植込みの後一周位は日蔭に置き徐々に日光に當てる、この植かへの時節は東京に於ては四月下旬から五月中旬迄が好期とされてゐる。

此外用土は京都方面では俗に京土と云ふ堀川邊の泥土を乾燥して粒としたもの、天神川砂の荒きものを交へる法。又赤土と竹藪の黑土とを混じ練り合せ乾燥して粒としたもの。赤土の粒と砂とを混じて用ゆる法、などあるが何れにしても適度の水分を含み水の停滯せぬ事を目的としたものである。然し砂を多く用ゆるものは夏季乾燥に過ぎて灌水に手數がかゝるが梅雨季などの根腐れを生ずる率は少ないやうである。

灌水は水拔けよく植へ込んであるだけに油斷が出來ない。と云ふて灌け過ぎてもよくない。要は盆土が少しく濕氣ある位迄乾いた時に灌水するのだが夏は

日沒に葉水を注ぎ葉の塵を淸掃する事は功果がある。

肥料は春彼岸頃から、秋の彼岸頃迄の間に施し、油粕の置肥もよいが油粕の腐汁を極めて淡くし十日に一回位施す、然しよく日光に當てるものは肥料を多くし、日蔭に置くものは減らさねばならない。

置場　日光の良く當る所に置けば新芽も花も澤山に着くが、葉は色が惡るくなり又伸びぬものである。春蘭をツメる時などは日光を强くあてゝ、肥料を多く水を少なくすれば短矮るが、度が過ぎると葉は損み、花は着かずに了る。春蘭のつめる物を除く外は夏は簀下に置くのが良い冬はなるべく室內に置き日中は日光に當て溫い水を灌いでやれば冬の間に春咲ものはの軸を伸ばし花期を初め秋咲ものも僅ながら翌春成長の準備をするから、なるべく溫い所に置く方がよい、種類に依ては凍結すると枯死するが金稜邊や春蘭は枯れるやうな事はない。秋から春までは雨に當てぬが安全である。

石菖

石菖とは石菖蒲の略稱であつて古人は菖蒲の一種として居たが、全く科を異にし菖蒲は鳶尾科に屬し、石菖は天南星科に入れられて居る、普通石菖と云へば吾國の川岸などに自生してゐるが盆栽に用ひらるゝものは「かうらい石菖」で吾國に自生してゐないものであるから、支那から傳へられたのであらう、別名や異名が限りなく付けられ菖羊、香苗、松衣介、陽春雪、望見消、紫茸、堯韮、虎鬚、水劍草、綠劍、劍背草などと云ふ。石菖とは石によくつく菖蒲と云ふ意味からなのであるが、又別に石上石潤菖蒲とも通稱されたのだと云ふ。

種類は園藝的に作り出されて澤山の變種が有るが盆栽として最喜ばるゝは葉の短かいものである。

有栖川　中葉の中の小なるもの

赤　韮　葉の長さ二三寸細く綠薄葉立ち亂る

天鵞絨　葉細く一寸に滿たず光澤ある濃青色

五分石菖　前種の更に短少なる最小葉

雪　山　中葉にして爪白となるもの

此の外京正宗(江戸正宗)晝夜、金華山、貴船、燕尾など尙澤山の變種があるが何れも大葉で石付などとするに不適當なため盆栽としては用ひられてゐない。

石菖には其性が强健なものと頗る弱いものとあるが概して斑入ものが弱く短矮なものが强いやうである、性水を好むから水盤栽植するを普通とし又石によく附着して生育するから多くは石付として其雅味を賞せられてゐる、これを作るには根を石に接し針金で縛りつけ灌水に注意すれば程なく固着する、石付とせない場合は水盤或は淺盆へ砂と土とを六と四位に混じ或は砂ばかりで植付ける。植かへは六七月頃が適當な時季である、此時は根分けを同時に行ひ疎密己の欲するまゝに植えるがよい、盛夏の頃は簀下で培養し、灌水は淸水を用ひねば腐敗する虞がある、冬は暖かき室に保護し氷結を防がねばならぬ、施肥は繁殖を望まないものは施さぬ方が短矮な面白いものとなる。

蘆

葦は「よし」とも「あし」とも讀まれる、どちらを讀んでもよしあしは無い、此外に濱荻灘波草など。所によつて異名がある、「灘波の葦は伊勢の濱荻」と云ふ標語がある位である。

盛夏の候は風に搖ぐ青葉を樂しみ初秋からは雁と供に引き出され蘆雁の書題に使はるる。

培養は至極容易な様だが中々六つかしい、春八十八夜後に水抜けよく鉢底へ荒砂を入れ土砂等分にして培養中は普通の鉢へ植つける、風通と日當のよき高棚に置き施肥と灌水を充分にし、所要の莖を殘し不用の新芽は出るに從つて悉く摘除する、年越しの古莖の存するものは尙夏のことである、かくすると莖に多くの新芽を生し先端が自と垂下して面白い味が出る、これを水盤に入れて水をたゝへると涼風座に生ずるの感がある。

葦の一種に臺灣萩と呼ばれてゐるものがある、又名を「ひなよし」とも云ふ、一見內

地產の「あし」に似てゐるが葉が割合に幅廣く其基部が莖を卷いてゐる、そして葉裏が帶白色である所が異る。冬期室內で保護すれば莖が枯死せないから翌春莖を卷く葉鞘を剝ぎ取つて枝を出さしめ懸崖とすれば其葉さや〳〵と風にそよぐ樣は凉味自ら溢れて夏季の好觀賞物である、肥枯するは勿論の事灌水も每日數回施さねばならぬ「九月より十月圓錐狀の穗を出し秋季の陳列にも雁などを配して用ゆれば絕好のものである。

又西湖葦と云ふ短矮な愛すべきものもある、これは水盤に最も適し短矮に縮培されたもの程貴ばれる。

此外に紅葦は主として其色彩の鮮紅を喜ばれるのであるがこれもやはり水盤に植へられて夏季より初秋の觀賞物である。紅葦と云ふが本來「紅ちがや」である別項に記す。

紅ちがや

「紅ちがや」は霜に逢ふて染める草では無い、生來其草頭は紅色を帶び半紅、半綠の美草であるが此草を見ると直に秋の紅草を思ふは夏の草では無い。殊に東京にゐて汚れたる紅葉に飽き足らないものは此草の「紅」に先づ滿足せなければなるまい「紅ちがや」は水草である。水草と云ふよりは水を好む草である、草丈僅に七八寸、莖をなさず柔かに立ちて、微風にもさや〳〵と搖ぎて葉摺れの音は秋の寂しさをつげる。

從來培養と繁殖が頗る困難なものとして其一つに數へられてゐた。それは水を好みながら根腐れを起し又容易に分蘖せず、次第に莖葉が減じ遂には一莖も止めざるに至るのが常である。此草を殖さうとして、肥料を隨時與ふれば、必ず根莖は腐れてしまう、又肥料を與へねば、成長せず、繁殖せないのは勿論である。

「紅ちがや」は普通鉢に植へ込み、常に多量の灌水を行ひ、肥料は極めて薄肥を時々施すが從來の培養法であるが。此草は極めて水を好む性質であるから、水盤を

用ゆるがよい。然して此草の分蘖を見ると根より上部の莖の節より分蘖するものであるから、初め植付の際深目の水盤を撰み、深く植へ込むのである。用土はケト土、蘆の根の長く地下に埋もれ變質したるもの、東京下町の地下より出づ)を用ひ夏季、二回程、水肥を施す、施肥した時は灌水を行はず、一端、其水肥を乾しつけて充分に植土に吸收せしめるのである、第一回と第二回とは十數日を隔て同一の方法をとるのである、爾後は只水盤の土上僅に滋へる程度に水を入れゝばそれで充分である。

書帯草

書帯草別名を秀墩草とも云ふ名が既に何か文人的脈絡がありさうで面白い、往古信書の帯に用ひられたに依ると傳へられる。此草を玩賞したのは遠く支那に初まる。山東の淄川に於て鄭康成が書を讀んだ所から出たと記されてゐる。

細く長く糸の如うな柔級な綠葉が四方に垂れて微風にも輕やかに搖ぎ靡き片

方に寄せられては復る風情は彼の風知草にも增して凉しき眺めであるが餘り人が好賞せないのは不思議である。この種類にもいろ〳〵ある、葉の幅の廣いもの細く短かいもの、花軸の長く抽き出るもの、葉の粗造なもの、葉の捻れるもの、など種々だが細く長く捻れずに伸び且つ花軸の伸びない種類てなくては良種と云へぬ良種は一葉の長さ二尺に及ぶのは珍らしくない。

春五月頃花穗を僅に現すから此時葉を損めぬやう拔き除けば葉の伸びをよくし密茂する。半陰草の性をもつものだから酷暑の候は簀下に置くか、或は午後の日を避けねばならぬ、植土は常に濕潤にしよく肥培するを要する、鉢は辰砂或は珊瑚釉の如き赤釉を用ひたのをよく見受けたが此草にどうしてか赤が適合する、止むを得ざれば白釉がよい赤でありながら朱泥の濕色では何故か引き立たぬものである。冬期の枯草にも又風情があるから根株の保護を兼ねて春迄其儘に枯葉を保存し早春萠芽前に丁寧に刈除し植替へを行ふ、土は腐葉土と眞土とを半々位に混じ砂を加へる必要が無い。置き場は風の强く當らぬ所が伸びをよくする。

支那水仙

新年の花としては、福壽草、雪割草、水仙などあるが最も盆栽家に喜ばるゝものは支那水仙であらう。然し普通のまゝに開花させたものは徒らに葉や花莖が長くて面白くない。又球に刀を入れて芽出しを容易にする球切りと云ふ仕立方があるが、これも軸が直立して雅趣に乏しい。

蟹作り（蟹切りとも云ふ）は球を扁平に作るために水盤に入れるに都合よく、葉は短かく半圓に曲りて丁度蟹の足のやうになり從つて草丈高からず花莖は短かく縮りて直立し、根は總々として白く長く水盤に擴がりて、其形が丁度蓑龜の尾の樣になる、これを色物の水盤に置けば美事なものである。

然し蟹作りを作るには一つの技巧を要す、そして白根の一二寸に伸びる迄は手入れが中々に面倒なためにこれを作る人は尠い。

蟹作りに加工して好結果を得るには、よい球根を求めねばならない。日本にても琉球小笠原島、千葉、埼玉、大阪地方で培養したものもあるが球が小さく花莖も徒

長して思ふやうな結果を得ない。輸入される支那水仙は上海方面から來るが一番よいのは廣東附近で培られた物が球も大きく矮性で花着も良く邦産の貧弱なるに比して一見見分けられる。

新年に花を見るには十月の下旬に加工すれば天然の日光にて充分に開花するフレーム又は硝子箱にて暖をとれば十一月中に作つても充分新年の間に合ふ。

支那球の良いのは多くは主球の兩側に子球が附いてゐる、そして芽は三個の球を通じて一列に備はつてゐるから此芽の一側面の球片を切り除きて芽を露すのみの事だが巧に加工せないと芽を損め花蕾に疵を付けてしまふから花が見苦しくなる。用具は小刀と竹篦のみで足りる、先づ取除く半側を徐ろに一片づゝ切り取つて芽に近づきたらば最も注意して竹篦のみを以て鄭寧に剝ぎ取るのである此加工したものは一見球を二つに割つた如く見ゆるが故に只兩斷したものと思ふ人もあるやうだが兩斷したのみでは大切の花芽も二つに切つてしまふから完全な花が咲く道理がない。

球片を除り芽を露出したものは其葉をも彎曲せしめる爲めに葉の一側を斜めに截ち取る事を要します、一側をそぎ取られた葉の幼芽は成長するに徒つて完全

なる一側は自由に伸び切り取られたる一側は固りて成長遅々たるが故に自然と曲りて蟹足の如くなるのである。

加工はこれでよい、先づ一日間水中に切り口を伏せて入れ置く時はノロ(球液)が澤山に見るからこれを洗ひ落し、第二日には切口を上向きにし球の上面に僅に水の及ぶ位の深さに浸して根の發生すべき所に脱脂綿を被ひ日に焦けぬ樣にし、日當りよき所に置く、かくすれば、數日して根は五六分に伸長するから脱脂綿を少しづゝ下方に下して根先の日に焦げぬ樣に注意する、一度日焦けした根は黑くなりて伸びが止まる。

此頃迄は每日一二回水を取り替へぬと球の切口が腐敗する慮がある、根が七八分に成つた頃は水を球の半に達する位の深さにし、釉藥のある水盤に移すがよいザラ〳〵した粗面の水盤に置けば根先きがつかへて長く伸びぬが滑りの良いものに置けば成績のよいものは總々と五六寸に及び拂子の樣になる。

一ケ月を經れば葉は上方に蜿曲し深緑となり花莖は伸び如何にも蟹を倒した樣な形を呈する。

其頃になれば數日に一回水を取りかへ日當りよき所に置き夜間は凍結せぬ樣

注意すればよいのである。殊に注意したきは水仙は劇しき毒を有する故口中に入れない樣に御用心を要する。

支那水仙の花は普通白色一重ですが十球に一つ位は重瓣のものがあるが單瓣の方が面白い。

鈴蘭（みきかげさう）

鈴蘭は君影草とも云ふ、又葉の形が馬耳に似てゐるので馬耳蘭など云ふ名もある。盆養して數十莖すく〳〵と立つて鮮緑の葉かげに純白の花を連ね咲き可憐の内にも氣品があつて、馥郁の香と共に風情見るべく、亦盆養の値がある。之を朱泥か南蠻の皿に收めて永く持ち込み數十莖簇生せしめたならば、盆栽に配する草物として又一品である。

殊に秋末、萎凋せる葉を抽いて珊瑚の美珠をつけたやうな姿は、又となく捨て難いものである。

きみかげさうはゆり科に屬し、地下の走莖より莖を抽いて、二三の長楕圓形の葉

を生ずる。葉下の莖の間から一莖を抽いて、一方に垂れた穗狀をなし、小さな鈴形の白花を綴る。花蓋は其端六裂して外捲し、雄蕊は六、雌蕊は一、果實は漿果で丸く熟して赤色となる。

鈴蘭

世界の北半球には到る所にあるが、本邦のものもその產地によつて形を異にし北海道のものは花形梢小に、東北地方の產は葉幅廣く、花も大きく花蓋は廣く開いて編笠のような形になるが唯少しく草の大なるを憾とする。上信の高原に產するものは草小に花大に盆に栽るに最も適する。尤もこの區別は大體のもので個體的の變化の多いものであるから產地によつても斯く確然たるものとばかりも言へない。其他白縞、黃縞、白覆輪、黃覆輪等のものもあり、殊に縞物は美しく珍らしいものである。

培養は甚だ容易で之を盆裡に栽えても年々繁殖してよく開花する。唯あまりに肥すと地下莖が長くのびて殖えはするが花を出すことが少ないから、增殖の目的以外にはあまりに肥培することは避けた方がよい。

かくて歲と共に葉もつまり、花も多く上げる樣になる。植えかへは株の殖えると共に鉢をゆるめればよく、又株間をくづして土を入れかへてもよいがこれはそ

の年は莖葉の生長も盛になり又土の古びも落ちてしまふ。只三五歳を鉢の內に經たものは是非ともかくして土をかへる要がある。又春に鉢の周圍の土を切りとつて新な土と更へるのも一方である。

肥料は開花に先つて一度腐熟した油粕の稀釋液を與へ、花後は油粕の塊を土の上に置き、葉が固つた後に之を取り去るがよろしい。

秋の實を見るには花粉の媒をしてやるがよい。置場は葉が固るまでは日を强く持ち、其後はなるべく午下の烈日を避け、秋に入つて葉が衰へたならば風雨はなるべく避ける事である。殊に雨にあへば病葉忽ち土に委して甚しく趣を損ずるこの頃になれば終日日に浴せしめて果の紅熟を扶ける。かくて日を經ると共に葉は黃凋して、相倚つて立ち、朱玉を連ねた果之を抽いて、こゝに周年の勞は酬ゐられるのである。

此頃獨乙種が盛に培養される。これは葉、花共に肥大で香も强い切花用としては最適である。

風知草（ふうちさう）

風知草は學名の方では知風草となつてゐる。その名の如く微風にもさや〳〵と搖ぎ涼味を唆るから夏の盆栽席にはよく添へられる、又秋日霜に逢ふて紅葉となつた、所謂草紅葉も捨て難い趣がある。

この風知草は草の內の變り物である、葉の表面と思はれるつまり上面は實は裏面なのである、よく見ると莖を卷いた葉柄から葉になる其付際で必ず一反り反轉してゐるから葉の表が下になつてゐる譯である。

これにもいろ〳〵の葉性があり、姬と稱するは七八寸の矮種であり紅葉もよいが、然し微風にも搖々と葉を飜す風情は普通の長く伸びる細葉性には及ばない、姬性は石付なぞにして極めて短かくつめて眺めるにはよい。

培養法は植土は何でもよい、よく日の當る所に置く、よく水を與へる、そして肥料は水肥として常に薄いものを與へるのであるが夏日の烈日には半陰に置く方が葉は美しく保ち得らる、植かへは早春に行ふ、前年の枯草はそれ迄つけて置き早春

未だ新芽を出さぬ内に叮嚀に土際から苅り取るのである、時季を後れると芽が枯莖の間へ伸び出して古莖を除くに面倒至極である。莖が伸びて尺余になつた時は下葉を除くと通風がよくなり見る目に凉しさうである。

明月草（姫虎杖）

めいげつ草と云ふても盆栽界では解る人が少ない、盆栽の方では虎杖（いたどり）と普通云ひ習はされてゐるが實は虎杖とは異ふのである、虎杖から人工による變種だとも云ふが、四國九州方面には稀に自生してゐるのを見れば矢張前説は誤りであらう。

此草の紫紅色の美は二月の花よりも紅なりと云ひたい、九月頃白い小花を群りつけた姿も又めづべきもの、花の蕚片は特に深紅色を呈しその色彩紅草中掘指の美草である、普通は淺盆に入れて短矮に培られるが石付に風趣あるものを多く見受くる、又伸びるだけ伸ばせて懸崖に作るもよい。植土は砂勝ちの排水のよいも

のを用ひるがよい「冬」は室内に保護する。こかね虫が好んで食ふものであるから常に注意するがよい従つて其産卵によつて幼虫が盆土の内に生ずるから最も注意を要する。

龍膽（りんだう）

秋も末になつて花稀な時に碧色の鮮かな筒狀五瓣の美花を開くから秋草中の異彩である草紅葉の中に入れるより其花の美を賞するべきであるが、其葉も濃紫色と云ふよりは寧ろ黑味がゝつたするどい色に染出して諸草か皆枯れ落葉の埋もれる中に獨り異彩を放ち綺趣を添へる。

八千草の枯葉落葉に埋もれて

色褪せず咲く龍膽の花

鉢に入れて培養すると莖が四方に垂れて萬燈のやうな態をする、花と葉の强い色彩の美は凉寂の頃の盆栽棚を彩るには無くてならぬものである。培養には深

い鉢を用ふる方が安全である植かへは繁々とする必要が無い、年を經るに從つて芽の數は次第に増す、實生は其年には花を見られぬが宿根草の常とて止むを得ない事とせねばならぬ。これに白花の一種があるが只珍貴とするまでゞ龍膽の面白味は矢張碧花の鮮かさにある。この草も藥草として古來重要なものゝ一つに加へられてゐるが唐藥龍膽と云ふ一種であつてその、黄色を帶びた其根である、頗る苦味を有つてゐるので龍の膽なんと云ふ名をつけられたのだらうと考察する

盆栽で秋樂しむのは普通の「りんどう」だが添物につかはれるのに「こけりんどう」と云ふのがある、これは花が龍膽に似て、莖は寸に及ばぬ勿論草紅葉の美は無いが盆の上によく栽培さるゝもので其名を負ふから一寸こゝに添記して置く。又龍膽の一種で普通「せんぶり」と云はるゝ姫性とも云ひたい龍膽がある、これは中々氣六ツケ敷い植物で盆養したのを見た事が無い、

昭和三年十二月四日印刷
昭和三年十二月六日發行
昭和十二年七月十日第八版發行

今の盆栽と
その培養法
【定價金八拾錢】

著者兼發行者　東京市外巣鴨町一一四一
小林憲雄

印刷者　東京市小石川區白山御殿町六
大居倉之助

印刷所　東京市小石川區白山御殿町六
大文堂印刷所

發行所　東京市外巣鴨町一一四一
叢會
振替東京三八〇七八番